

## グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

— 一方的恋愛結婚について —

### Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über die Heirat der einseitigen Liebe

太田伸広

**要旨** 一方的恋愛結婚は、相手の意思を確認せず、一方的な恋愛感情で相手をもらう結婚である。一方的恋愛結婚の特徴の一つは、一方的に惚れ、結婚しようとする者は、社会的地位、身分が相手より上で、しかも男性だということである。もう一つは、一方的恋愛結婚は相手の意思、考え、感情などを無視した結婚であるにもかかわらず、実際にはそれが苦難、困窮、いじめ、迫害からの主人公の救済になっていることである。そしていじめたり、迫害した者は悲惨な罰を受けることが多い。次は、グリム童話と『日本の昔ばなし』の相違点である。前者では、家の干渉などまったくなく、惚れて結婚しようとする者が自分の思いをはっきりと打ち明けて結婚するが、後者では、一方的に惚れて結婚しようとするほどに積極的な気持ち、愛情があるのに、自らの思いを相手に打ち明けない話が半数近くもある。親任せ、家任せなのである。グリム童話では主人公はほとんど全員が外見の美しさに惚れるが、『日本の昔ばなし』では主人公の多くが内面の美しさに惚れる。

#### はじめに

グリム童話と『日本の昔ばなし』を一方的恋愛結婚に焦点を当てて比較する。分析の対象は、グリム童話の場合は、1857年の決定版のKHM 200篇、203話で、日本の昔話の場合は、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話である。グリム童話のテキストは、BRÜDER GRIMM Kinder-und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999である。参考にした訳は、金田鬼一氏の『グリム童話集』（岩波書店）である。

結婚は、その種類と類型の両面から分析することにする。種類とは、恋愛結婚、難題解決結婚、魔法からの解放結婚、政略結婚、等々である。類型であるが、異なる結婚、例えば、恋愛結婚と難題解決結婚であっても、王家（殿様家）の男と王家（殿様家）の女の結婚ということでは同じ型の結婚であり、それを結婚の類型と呼ぶことにする。王家（殿様家、高貴な身分）の男と王家（殿様家、高貴な身分）の女の結婚を類型1、王家（殿様家）の男と庶民の女の結婚を類型2、庶民の男と王家（殿様家）の女の結婚を類型3、庶民同士の結婚を類型4とする。

一方的恋愛結婚とは、文字通り男性が女性に一方的に恋をするか、逆に女性が男性に一方的に恋をし、相手の意思を確認せずに、あるいは相手の意思がわからないままに、結婚にまで行

き着く結婚のことである。つまり、結婚する当事者の内、一方は愛情や好意を抱いているけれども、他方は愛情がなかったり、結婚に無関心であったり、求婚に暗黙の了解さえ与えなかったり、愛とは別の意図で結びつく結婚のことである。

グリム童話には、このような一方的恋愛結婚は全部で8篇9組あり、21篇、23組の恋愛結婚、13篇、15組の魔法からの解放結婚、13篇、13組の難題解決結婚、10篇、10組の条件結婚について第5位を占める。一方的恋愛結婚では、類型1が3篇、3組、類型2が5篇、5組、類型3が1篇、1組あり、類型4はない。『日本の昔ばなし』には、一方的恋愛結婚は、7話、7組ある。類型1が2話、2組、類型2が5話、5組で、類型3と類型4はない。7話、7組というと、少ないように思えるかも知れないが、『日本の昔ばなし』には、結婚の話は240話中38話（49組）しかないで、一方的恋愛結婚が18.4%（一つの話に2種類、3種類の結婚が語られたりするので、全体は45話、49組。だから厳密には15.6%）も占めることになり、非常に多い。このように、『日本の昔ばなし』には、もともと結婚の話が少ないうえに、第1位を占めるのが不明の結婚（10話、10組）であるから、事実上、7話、7組の一方的恋愛結婚が『日本の昔ばなし』の第1位を占めていることになる。この事実は重い。とりわけ『日本の昔ばなし』全体の特徴を考える場合に、不明の結婚が第1位、一方的恋愛結婚が第2位、お礼結婚（6話、6組）が第3位、家父長的結婚（5話8組）が第4位、押売り結婚（4話、4組）が第5位を占めているという事実、それだけで全体の約71%を占めるという事実は、グリム童話の結婚話の順位と比較すると、何か重要な示唆を与えていると思われる。

## 第1章 グリム童話の一方的恋愛結婚

### 第1節 類型1の一方的恋愛結婚

これから、グリム童話の一方的恋愛結婚を類型別に具体的にみていくことにする。

最初はKHM 49の『6羽の白鳥 Die sechs Schwäne』である。

むかし昔、ある王様が大きな森で狩をしていて、道に迷ってしまった。すると、王様の方に年老いた魔女がやって来た。魔女は、王様が自分の娘と結婚すると約束するならば、森の出口を教えてやると言った。王様は森の中で飢え死にすることを心配し、結婚の約束をした。娘は大変美しかった（sehr schön）けれども、王様はその娘が気に入らなかったし、「娘をまじまじと見ると、心の中でぞっとするような恐ろしさを感じざるをえなかった。er konnte sie ohne heimliches Grausen nicht ansehen.」それでも王様は約束を守り、魔女に道を教えてもらい、森から出て、お城に帰り、娘と結婚式を挙げた。この二人の結婚は、押売り結婚なので、ここでは分析の対象としない。

王様には、6人の男の子と女の子が一人あった。王様は新しいお后（継母）が子供たちに危害を加えるのではないかと思い、森の中のお城に隠しておいた。それでも、継母は子供たちの居場所を突き止め、魔術（die Hexenkünste）で6人の王子を白鳥にしてしまった。お城の中にいた妹だけは魔法を逃れることができた。そして兄の王子を探しに森奥深くに入って行った。そして一軒の小屋（eine Wildhütte）を見つけた。そこで、妹は兄たちに出くわした。兄たちは毎晩15分間だけしか人間の姿に戻ることができなかった。白鳥の兄を救う方法は、6年間話すことも笑うこともせず、友禅菊（Sternblumen）で兄さんたちの肌着（sechs Hemdchen）を編むことであった。妹のお姫様は木の上に座って、黙々と肌着を編んでいた。そこに、この

国の王様が狩をしにやって来た。そして何の返事もしないお姫様を狩人たちが木から下ろし、王様の前に連れて行った。王様が何を尋ねても、お姫様は黙ったままであったが、「お姫様が非常に美しかったので、王様は心を動かされ、お姫様に強い愛情を抱いた。Weil es aber so schön war, so ward des Königs Herz gerührt, und er faßte eine große Liebe zu ihm.」そして王様はお姫様をお城に連れて帰った。そして「王様はその子の慎み深い表情としとやかさがすっかり気に入りに、言った。『この者とわしはどうしても結婚したい。世界中探しても他に誰もいない。』 und seine bescheidenen Mienen und seine Sittsamkeit gefielen ihm so sehr, daß er sprach ‘diese begehre ich zu heiraten und keine andere auf der Welt,」そして数日後に（nach einigen Tagen）結婚した。

若いお后様に子供ができると、王様の悪い母親は、子供を取り上げ、お后様の口に血を塗り、王様に「あれは人食い女だ sie wäre eine Menschenfresserin.」と訴えた。王様はそんなことには耳を貸さなかったが、それが三度も続くと、打つ手がなくなり、お后様を火あぶりの死刑（den Tod durchs Feuer zu erleiden）に処した。そして薪に火がつけられようとした時、6羽の白鳥が飛んできた。その時が丁度6年が過ぎ去った瞬間だったのだ。そしてお后様が肌着を投げかけると、白鳥は人間の姿に戻った。それから、お后様は自分の無実を王様に訴えた。そして子供たちも連れてこられた。母親は火にあぶられ、灰燼に帰した。「王様とお后様は6人の兄さんと一緒に長年仲良く幸せに暮らした。Der König aber und die Königin mit ihren sechs Brüdern lebten lange Jahre in Glück und Frieden.」

さて、王様とお姫様の結婚はどのような結婚であろうか。「この者とわしはどうしても結婚したい。（結婚したい者は）世界中で他に誰もいない。」と言う王様がお姫様に「強い愛情を抱い」ていることは明白であるが、お姫様は王様の問いかけにも、お城に連れて行かれた後も、何も言わないし、何の反応も示さない。兄たちを解放するために、お姫様が口を利くことが出来なかったのは、理解できるとしても、態度や表情でなら、何らかの意思表示をすることは出来たはずなのである。この点で、同じように笑うこともしゃべることもできなかった『十二人の兄弟』の王女が、王様の求婚に対して「頭で少しうなずいた」のとはまったく違う。そればかりか、このお姫様は、6年が経ち、口が利けるようになってからも、自分が無実であることは訴えるが、王様への思いも、他のことも一切口に出さないし、態度にも表さない。それゆえ、王様とお姫様の結婚は、一方的恋愛結婚である。

王様とお姫様が結婚するにあたっては、誰の反対もなかった。しかし、結婚後は、王様の母親が猛反対をする。「口も利けないようなこの小娘、どこの生まれか知れたもんじゃない。王様にはふさわしくありません。‘Wer weiß, wo die Dirne her ist,’ sagte sie, ‘die nicht reden kann: sie ist eines Königs nicht würdig.’」と言い、三度も若いお后様の赤ちゃんを取り上げ、お后様の口に血を塗り、赤ん坊を食ったと言って、お后様を火あぶりの刑にして、殺そうとする。王家という由緒ある家からの強烈な反対である。

第2番目はKHM 65の『千種皮（Allerleirauh）』である。

「むかし昔王様があった。王様には金色の髪をしたお后様があった。お后様は、お后様と並び立つ者はこの地上にはいないくらい美しかった。Es war einmal ein König, der hatte eine Frau mit goldenen Haaren, und sie war so schön, daß sich ihresgleichen nicht mehr auf Erden fand.」お后様は自分の死を予感し、新しいお后様は「私と同じくらい美しく」、「私と同じ金色の髪」をした人でなければなりません、と王様に言って、お亡くなりになった。王様はこの

条件を満たすお后を探したが、見つからなかった。ところが、自分の娘を見ると、亡くなったお后様と瓜二つで、非常に美しく、金色の髪をしていた。王様は娘に「激しい恋愛感情 eine heftige Liebe」を抱き、相談役たちの反対にもかかわらず、娘に結婚の意志を伝えた。娘は驚き、結婚を思いとどまらせようと、父王に、到底無理だと思うような要求を出した。つまり「お日様のような黄金の衣裳 eins so golden wie die Sonne」と「お月様のような銀色の衣裳 eins so silbern wie der Mond」と「お星様のように輝く衣裳 eins so glänzend wie die Sterne」と「千種類の動物の皮と毛でこしらえた外套（コート） einen Mantel von tausenderlei Pelz und Rauhwerk」を手に入れて欲しいということであった。これで、父王が娘と結婚するというような考えを捨ててしまったのである。ところが、王様はこれらを調達して、娘の前に持ってきた。

そこで、お姫様は、「金の指輪 einen goldenen Ring」と「小さな金の糸紡ぎ車 ein goldenes Spinnrädchen」と「小さな金の糸繰り車 ein goldenes Haspelchen」を持ち、顔と両手に煤を塗って変装し、千種皮の外套を着て、草木も眠る真夜中に、逃げ出した。そして夜通し歩いて、大きな森の中へ入り、木の洞の中で寝た。陽が高くなってから、ある王様が森の中で狩をした。犬が木の下で吠えたので、お姫様は狩人たちに見つかり、お城へ連れて行かれ、台所女にされた。

あるとき、お城で祝宴が催された。台所女のお姫様は料理人に許しを請い、「お日様のような黄金の衣装」を着て、お祝いの席へ出た。王様は「こんなに美しい人は、今までこの目で見たことがない。so schön haben meine Augen noch keine gesehen.」と思い、女の子を踊りの相手にした。しかし、舞踏が終ると、女の子はお辞儀をし、あっという間に姿を消した。そしてまた千種皮の台所女になった。お料理番から王様のスープを作るように言われた台所女は、スープの中に「金の指輪」を入れた。スープは格別美味で、王様は誰が作ったかと問いたしたが、台所女の正体はばれなかった。

また、祝宴が催された。今度は、台所女は「お月様のような銀色の衣装」を着て宴席に出た。そして王様と舞踏をし、またすばやく姿を消した。それから、台所女に戻り、王様のスープをこしらえた。今度は「小さな糸紡ぎ車」をスープに入れておいた。また格別の味がした。

三度目の祝宴の時、千種皮は「お星様のように輝く衣装」を身にまとって出た。今度は王様は、こっそり女の子の指に「黄金の指輪 einen goldenen Ring」をはめておいた。舞踏が終わるとまた、お姫様は大急ぎで階段の下の自分の寝起きの場所へ帰った。そして、台所女となって、今度は「小さな金の糸繰り車」の入ったスープを作った。王様はその台所女の指輪を見て、それが一緒に踊った舞踏の相手だとわかった。それから「王様は外套をつかみ、それを剥ぎとった。すると、黄金の髪の毛が現れ、そこに女がきらびやかな美しい姿で立っていた。女はもう逃げ隠れることができなくなった。そして煤と灰を顔から拭いて落とすと、その女はこの地上で今までに見た中で誰よりも美しかった。Der König faßte den Mantel und riß ihn ab. Da kamen die goldenen Haare hervor und sie stand da in voller Pracht und konnte sich nicht länger verbergen. Und als sie Ruß und Asche aus ihrem Gesicht gewischt hatte, da war sie schöner, als man noch jemand auf Erden gesehen hatte.」王様は言った。「お前はわしの愛する花嫁だ。もうこれからは、互いに離れることはないぞ。du bist meine liebe Braut, und wir scheiden nimmermehr voneinander.」「それから、ご婚礼の式が挙げられ、二人は死ぬまで楽しく（何不足なく）暮らした。Darauf ward die Hochzeit gefeiert, und sie lebten vergnügt bis an

ihren Tod.]

王様と千種皮（お姫様）との結婚は、美しい乙女、美しいお姫様に惚れた王様の一方的恋愛結婚である。王様が千種皮に惚れていることは明らかだが、千種皮の方はどうであろうか。千種皮が祝宴の席に出る行為は、同じ「一方的恋愛」に属するKHM 21の『灰かぶり』のように、祝宴に強く惚れた訳でもなく、KHM 127の『鉄のストーブ』のお姫様やKHM 186の『本当のお嫁さん』のように、自分が本当の嫁であることを舞踏相手の王子にわからせるために祝宴の席へ出た訳でもなく、また密かに相手の気持ちを惹こうとしているようにも思えない。そしてまた「逃げ隠れることができなくな」って、一緒に舞踏をしてすでに顔見知りのはずの王様に結婚の申し込みをされたときも、無反応である。父王からの求婚にぞっとし、お城から逃げ出した意志の強い女性のはずなのである。この点で、愛することから結婚へといたる過程に不自然さや無理が見られないKHM 115の『親方の娘』の場合やKHM 181の『村の美しい娘』の場合とも少し事情が違うように思われる。これらを総合して、王様と千種皮の結婚は一方的恋愛結婚に分類する。

このようなお姫様の態度は、父親に求婚されるという、いわば呪わしい過去を背負った娘の波乱に満ちた逃亡生活という全体のストーリーとも関わり合いがあるであろう。二人の結婚生活はまことに幸せである。

第3番目はKHM 126の『誠実フェレナントと不実フェレナント (Ferenand getrü Und Ferenand ungetrü)』である。

むかし昔、裕福な男と妻がいて、貧しくなったとき、男の子が生まれた。貧し過ぎて名付け親がいなかった。亭主が名付け親を捜しに隣村へ行く途中、乞食 (de Bettler) に出くわした。乞食は名付け親になってあげようと言ひ、誠実フェレナントという名前を付けてくれた。そして、乞食は、私は貧しくて何もないけど鍵 (Schlüssel) をあげる、14になったら (vertein Johr old)、原野 (Heide) のお城 (Schlott) へ行つて、この鍵で開けなさい、そこにあるものはすべてこの子のものだ、と言つた。

フェレナントが14歳になり、原野へ出かけていくと、お城がたっていた。そのお城を例の鍵で開けると、中に「白馬 (Schümmel)」が一頭いた。フェレナントはその白馬に乗り、お父さんの所へ帰つてきた。

それからフェレナントはお父さんに別れを告げ、白馬に乗つて旅に出た。途中で「羽ペン (Schriffedder)」を拾つた。先へ進んでいくと、ぬかるみ (Kot) の中で、魚が口をばくばく開け、苦しそうにしていたので、助けてやった。すると、その魚はお礼に「呼笛 (Flötenpiepen)」をくれた。

もう少し先へ進んでいくと、今度は不実フェレナントという名の男に出会つた。

二人は、宿屋の娘の紹介で、王様に仕えることとなつた。ある日、王様は、不実フェレナントにそそのかされ、誠実フェレナントに「自分の最愛の女 (mine Leiveste) ('ne Leiveste)」を連れて来い、連れて来なければ命はないものと思へ、と命令した。誠実フェレナントが嘆いていると、白馬が王女 (Prinzessin) を連れ出す方法を教えてくれた。誠実フェレナントが白馬の言つた通りのことをすると、巨人たち (de Riesen) は喜んで王女を船に運んでくれた。こうして王様の愛する王女をお城に連れて帰つた。

それからお城で、婚礼の式が挙げられた。「しかし、王様には鼻がないので、お后様は王様が好きになれず、誠実フェレナントの方に好意を寄せた。De Künigin mogte awerst den Künig

nig lien, weil he keine Nase hadde, sonnern se mogte den Ferenand getrü geren lien.」そこで、お后は、私は奇術（Kunststücke）をこころえておりますと言って、誠実フェレナントの首を切り、それをまた元通りにつないだ。感心した王様に、お后様は、王様もいかがでしょうか、試みてみませんか、と誘い、喜んで応じた王様の首を切り、元へ戻さなかった。「それから、王様は葬られ、お后様は誠実フェレナントと結婚した。Da werd de König begrawen, se awerst frigget den Ferenand getrü.」

そして誠実フェレナントはいつも白馬と遊んでいたが、ある日白馬に言われるまま、白馬に乗って3度輪乗りをした。すると、白馬は王子になった。

このメルヘンには2組の結婚がある。一つは、鼻なし王様と王女の結婚である。これは、王女に惚れ込んだ王様の一方的恋愛結婚である。類型は王家と王家の結婚の類型1である。もう一つは、その王女（お后様）と誠実フェレナントの結婚である。こちらは、王女の一方的恋愛結婚である。これは庶民の男と王家の女の結婚で、類型3である。

前者の結婚生活は、夫である王様が妻のお后様に殺されるのであるから不幸そのものである。

後者の結婚生活が幸福か否かはまったく不明である。そもそも誠実フェレナントがこのお后様のことをどう思っているのかわからない。何とも思っていないとしか思えない。「それから、王様は葬られ、お后様は誠実フェレナントと結婚した。」とあるように、誠実フェレナントは結婚に対して、またにお后様に対して、何の関心も示さなかったし、結婚後は白馬とばかり遊んでおり、お后様のことなどまったく眼中にないからである。誠実フェレナントのこれらの行動は、お后様の一方的恋愛結婚を裏付ける行動である。このようなフェレナントの態度も、誠実なものは結局救われる、というこのメルヘンのストーリーの必然的な結果なのであろう。自分の嫌いな者を殺害した殺人鬼のお后様と殺害後すぐに結婚するという、通常感覚では考えられない、非常に奇妙な誠実フェレナントの行動も、庶民の男性にとってお后様と結婚することは最高の出世だと考えれば、何ら不自然なところはない。

## 第2節 類型2の一方的恋愛結婚

最初はKHM3の『聖母マリアの子（Marienkind）』である。

ある樵が貧しさのあまり、3歳になる娘を育てることができなかった。ある朝森へ入ると、聖母マリア様が娘を母親に代わって育ててあげると言われた。娘は、天国でマリア様に育てられ、幸せな生活を送った。ところが、娘が14歳になったとき、娘はマリア様から開けてはならないと言われていた扉を好奇心から開けた。しかし、このことをマリア様に問いつめられた娘は、素直に白状しなかった。そこで、娘は天国から下界の荒野（Wildnis）に追い帰された。娘がそこで一人暮らしている内に、着物はぼろぼろになり、身体から落ちてしまった。その代わり、髪の毛が身体全体を覆った。ある時、狩りをしていた王様が黄金色の髪の毛（von seinem goldenen Haar）をした驚くほど美しい女の子（ein wunderschönes Mädchen）を見つけ、「お前、わしと一緒にわしのお城に来る気はないか willst du mit mir auf mein Schloß gehen?」と言うと、ものが言えなかった「女の子は頭でほんの少しだけうなずいた。Da nickte es nur ein wenig mit dem Kopf.」そこで王様は女の子をお城に連れて帰り、美しい服を着せてやった。「女の子は話すことはできなかったけれども、非常に美しく可愛らしかったので、王様は心から女の子が好きになり、間もなく女の子と結婚した。Und ob es gleich nicht sprechen konnte, so war es doch schön und holdselig, daß er es von Herzen lieb gewann, und es

dauerte nicht lange, da verschmählte er sich mit ihm.」やがてお后様は男の子をもうけたが、マリア様にまたも嘘をついたので、マリア様に男の子を連れて行かれた。そこで、お后様は人食い (Menschenfresserin) だという噂がたった。王様は聞く耳をもたなかった。2人目の男の子が生まれたときも同じであった。明るる年、お后様が女の子を産んだときも、マリア様に本当の事を白状しなかったので、マリア様が女の子を天国 (Himmel) に連れ去った。同じことが3度重なったとなつては、さすがの王様も、お后様は人食いだというみんなの非難を無視することができず、仕方なくお后様を火あぶりの刑に処すことにした。この時になってようやくお后様は、マリア様に「私はそう致し (ドアを開け) ました。ich habe es getan!」と白状した。すると、天は雨を降らせ始め、火を消した。それから、マリア様が3人の子どもを抱いて現れ、「罪を悔い白状する者は許されている。wer seine Sünde bereut und eingesteht, dem ist sie vergeben,」と言われて、子供を渡し、お后様の舌を自由にし、一生涯の幸せを授けた。

王様が女の子を見つけたとき、まったく驚いて見つめ (Er ... betrachtete es voll Erstaunen,)、どうして荒地 (Einöde) にいるのか尋ね、それからお城へ誘った。お城へ来ないかと誘う場合もいろいろな場合がある。それが結婚を意味するときが最も多いが、極端な場合には、『千種皮』のようにお城に連れて帰って台所女にする場合もある。また、『6羽の白鳥』のようにお城に連れて帰って、しばらく一緒に生活をし、娘 (お姫さま) の慎み深い (bescheiden) 態度としとやかさ (Sittsamkeit) を見て結婚を決意する場合もある。この『聖母マリアの子』も王様が女の子をお城へ連れて帰り、それからその子の「schön und holdselig」に心底惚れ、「間もなくして nicht lange」結婚している。だから、女の子がお城へ誘われたときに、ほんの少し頭でうなずいたけれども、それをただちに結婚の承諾と見なすことはできない。察するに、結婚への期待はあったであろうが、王様は「お城に来る気はないか」としか言っておらず、それが王様の正式な求婚とは言えないからである。むしろ、木の空洞の中で寝起きし、野山の食べ物を口に、冬は蓄えの胡桃のみで命をつなぎ、木の葉で寒さに耐える生活に死の恐怖も覚える「この世の悲惨さと惨めさ (den Jammer und das Elend der Welt)」から逃れたかったことの方がうなずいた理由としては強かったであろう。女の子のうなずきには結婚願望はあったかも知れないが、それをただちに王様への好意と取るには無理がある。実際、いざ結婚というときになったとき、女の子は結婚に対しても王様に対しても何の反応も示していない。こういう訳で、王様と女の子の結婚は、恋愛結婚ではなく、王様の一方的恋愛結婚に分類する。しかし、この場合、あらゆる分類に付き物の境界線上の困難さ、曖昧さは残る。

第2番目はKHM 13の『森の中の3人の小人 (Die drei Männlein im Walde)』である。

このメルヘンには2組の結婚がある。一組は男やもめと女やもめの結婚であり、もう一組は王様と継子娘の結婚である。前者は恋愛結婚である。

後者はどうであろうか。継母から、冬氷の張った川に穴をあけ、より糸 (Garn) を濯いで (schlittern) 来いと命令された継子娘が、言われた通り、氷に斧で穴を開けていると、王様が通りかかり、事情を聞いて娘を哀れに思い、「娘が並はずれて美しい so gar schön」ので、「わしと一緒に行く気はないか。willst du mit mir fahren?」と誘った。継子娘は「えっ、もちろんございます。心から喜んで Ach ja, von Herzen gern,」と言い、王様と一緒にお城へ行った。その訳は、「そうすれば、お母さんと妹 (姉) の目から逃れられることになるのが嬉しかったからです。denn es war froh, daß es der Mutter und Schwester aus den Augen kommen sollte.」と、はっきりと述べられているように、継母とその実の娘による日常的ないじめ、例えば、冬

辺り一面に雪が積もっている中を紙の服を着せられ、苺を取って来いと命令されるような虐待から逃れられるからである。だから、この娘の喜びの感情は王様への愛情を表現したものと取る訳にはいかない。したがって、王様と継子娘の結婚は王様の一方的恋愛結婚である。

王様と継子娘の生活は、結婚後「大きな幸せ (von dem großen Glücke)」に包まれていたが、王様のお后様は、継母とその娘によって、川に放り込まれ、(死んで) 鴨になり、幸せな生活は一転して不幸になる。しかし最後に、鴨の姿からお后様の姿に戻り、みずみずしく、元気で、健康になったのだから、全体としては幸せと言って差し支えないであろう。しかし、その様子が書かれていないので、結婚生活が幸福か不幸か、不明としておく。

継子娘は、もともと「美しくって可愛らしかった schön und lieblich」が、さらに小人たちが、「日増しに美しくなる」という贈物をしたので、この上なく美しい。

全体のストーリーは、継母と「醜くへどが出そうだった (häßlich und widerlich)」実の娘によるいじめ、虐待と、いじめられた継子娘が、人がうらやむような結婚をするということである。ただ、このメルヘンでは、継子娘が王様と結婚してお后様になった後も、継母とその実子によるいじめ、殺人という犯罪が行われる。そして最後の最後にそれが裁かれ、残酷なまでの処刑が行われるという、グリム童話によくあるストーリーが続く。

第3番目は KHM 21 の『灰かぶり (Aschenputtel)』である。

「あるお金持ちの男の妻が病気になる Einem reichen Manne, dem wurde seine Frau krank,」幼い一人娘 (ihr einziges Töchterlein) を後に残し天国に行ってしまった。

そして「お日様が白い雪のおおいを取り除けた頃、男は別の女を妻にした。」この女には2人の連れ子があった。そのときから、継母とその実の娘たちによるいじめ、虐待が始まった。姉妹たちはエンドウ豆 (豌豆) やレンズ豆 (扁豆) (die Erbsen und Linsen) を灰の中へぶちまけ、娘にそれらを拾わせた。また娘はかまどのそばの灰の中で寝かされたので、娘はいつも汚く「灰かぶり」と呼ばれた。

あるとき、お父さんが旅に出て帰ったとき、姉妹たちは、おみやげに自分たちがおねだりしていたきれいな衣装 (Schöne Kleider) や真珠と宝石 (Perlen und Edelsteine) をもらったが、灰かぶりは、望み通りのはしばみの木の小枝 (ein Haselreis) をもらった。それから灰かぶりは、その小枝を持って、「お母さんのお墓へ行き、その小枝をお墓にさした。」その木は灰かぶりの悲しみの涙で、大きくなり、立派な木 (ein schöner Baum) になった。「灰かぶりは、毎日三度その木の下へ行き、泣いてお祈りをした。すると、そのたびに白い小鳥が一羽この木にやってきた。そして灰かぶりが望みを言うと、その小鳥が望んだものを落としてくれた。Aschenputtel ging alle Tage dreimal darunter, weinte und betete, und allemal kam ein weißes Vöglein auf den Baum, und wenn es einen Wunsch aussprach, so warf ihm das Vöglein herab, was es sich gewünscht hatte.」

「王様が三日にわたる祝宴を催したことがありました。その祝宴には、王子が花嫁を探すことができるようにと、国中の美しい乙女がすべて招待された。Es begab sich aber, daß der König ein Fest anstellte, das drei Tage dauern sollte, und wozu alle schönen Jungfrauen im Lande eingeladen wurden, damit sich sein Sohn eine Braut aussuchen möchte.」二人姉妹も招待された。二人は、祝宴に出られると聞いて大喜びし、灰かぶりにおめかしの手伝いをさせた。「灰かぶりは言われたことをしながら泣いた。できることなら、灰かぶりも一緒に舞踏会へ行きたかったからでした。Aschenputtel gehorchte, weinte aber, weil es auch gern zum Tanz

mitgegangen wäre,」灰かぶりは継母に行かせて下さいと頼んだが、継母はがんとして受け付けなかった。しかし、灰かぶりがしつこく頼むと、継母は舞踏会へ連れて行く条件として、次々と難題を灰かぶりにふっかけてきた。灰かぶりは、それら難題を小鳥たちの助けで難なくやり遂げ、「一緒に祝宴に行けると思い、喜んだ。das Mädchen … freute sich und glaubte, nun dürfte es mit auf die Hochzeit gehen.」しかし、結局許しは得られなかった。継母と娘二人は灰かぶりを家に置いてきぼりにして、行ってしまった。

そこで灰かぶりは、「お母さんのお墓のはしばみの木の下へ行って」、「金と銀を私の上へ投げて wirf Gold und Silber über mich.」と言うと、「あの鳥が金色と銀色の衣装と絹糸と銀糸で刺繍した上靴を灰かぶりに投げて落としてくれた。Da warf ihm der Vogel ein golden und silbern Kleid herunter und mit Seide und Silber ausgestickte Pantoffeln.」灰かぶりはそれを着て舞踏会へ出かけて行った。

王子は、美しい (schön) 灰かぶりとはばかり舞踏をし、他の男たちには、灰かぶりと踊ることを許さなかった。灰かぶりは、止める王子の手を振り切って帰った。

明るる日も祝宴 (das Fest) があった。両親と義理の姉妹 (die Eltern und Stiefschwestern) が祝宴に出かけて行った後、灰かぶりは、またはしばみの木のところへ行って、頼みごとをした。「するとあの鳥が前の日よりもずっとずっと華美な衣装を投げて落としてくれた。Da warf der Vogel ein noch viel stolzeres Kleid herab als am vorigen Tag.」灰かぶりはそれを着て祝宴へ出かけて行った。すると、王子はまた灰かぶりを舞踏で独占した。今回も灰かぶりは、止める王子を振り切り、追いかけてくるのをかわし、逃げ帰ってきた。

三日目は、灰かぶりは、いつもの鳥がくれた「これまでにまだ誰も手にしたことのないような豪華で、光り輝く衣装 ein Kleid …, das war so prächtig und glänzend, wie es noch keins gehabt hatte,」とすべてが金 (ganz golden) でできた「上靴」を身につけて、祝宴 (Hochzeit) へ出かけて行った。

今度は、王子は灰かぶりの正体をつかもうと、階段にピッチを塗っておいた。「夕方になって」灰かぶりが「王子のもとから逃げ帰る (es entsprang ihm)」とき、ピッチに左の靴がくっついて離れなかった。灰かぶりは、それをそのまま置き去りにして家に帰った。

あくる日の朝、王子は靴を持って男の所 (灰かぶりの家) へ行き、「この金の靴が足にぴったりと合う者以外は私の花嫁にしない。keine andere soll meine Gemahlin werden als die, an deren Fuß dieser goldene Schuh paßt.」と言った。姉妹は、金の靴が非常に小さくて足に合わなかった。そこで包丁で「爪先を切り落とし hieb die Zehe ab」て、靴を履き、王子の馬に乗って出かけたが、はしばみの木にとまっていた2羽の小鳩 (Täubchen) の告げ口で、偽の花嫁 (die falsche Braut) であることがばれてしまった。妹は、包丁で「かかと ein Stück von der Ferse」を切り落として靴を履いたが、また、あの2羽の小鳩に正体を暴かれてしまった。

王子は、両親がもう娘はおりませぬ、「ただ、先妻の子で、体の小さな、発育の足らない灰かぶりがまだおるにはおりますが、お后様などとてもなれるものではございません。nur von meiner verstorbenen Frau ist noch ein kleines verbüttetes Aschenputtel da: das kann unmöglich die Braut sein.」と断るのも聞かず、是非その娘を連れて来いと言った。そこで灰かぶりが呼んで来られた。すると、黄金の靴は灰かぶりにぴったりと合い、顔も見覚えがあったので、王子は「お前こそ本当の花嫁だ。das ist die rechte Braut.」と言った。それから、王子は二人の姉妹が怒りだしたのもかまわず、灰かぶりを馬に乗せて帰っていった。そして、結婚式 (die

Hochzeit) が挙げられることになった。

姉妹2人が「灰かぶりの福を分けてもらおうと wollten … teil an seinem Glück nehmen」、教会へ出かけて行ったとき、2羽の鳩が姉妹の「目玉を一つずつつき出した。da pickten die Tauben einer jeden das eine Auge aus.」そして教会の帰りには、その2羽の鳩がもう一方の目玉をつつき出した。このようにして、姉妹は生涯目が見えなくなるという罰を受けた。

さて、王子と灰かぶりとの結婚であるが、これはどういう種類の結婚であろうか。王子が灰かぶりにぞっこん惚れ込んでいることは明々白々であるが、灰かぶりの態度、意志、感情、気持ちがあったくといっていいほどわからない。灰かぶりは、王子がお嫁さんを探すための祝宴、舞踏会へあれほど行きたかったのであるから、その少女 (Mädchen) が王子との結婚をまったく意識していなかったとは言い切れない。しかし、少女が泣いて行きたいと訴えたのは、むしろ、王宮の舞踏会には娘なら誰でも強くあこがれるであろうし、灰かぶりもその例に漏れない普通の女の子であった、と考えた方が、また、自分一人が置いてきぼりにされるのには耐えられないし、是非とも二人の姉妹と一緒にいきたい、一緒に行動したいと思うのは子供として当たり前だと考えた方が、後の筋の展開からして、適切であろう。実際、灰かぶりは、「祝宴で舞踏できることを大喜びし」ている継母の实の娘二人の「おめかしの手伝いを」しながら、「一緒に舞踏会へ行きた」いと思い、泣いている。さらに、灰かぶりは3度の舞踏会へ出席したにも関わらず、3度とも逃げ帰っており、また王子が家に来てもし出て行かなかった。そして、王子に「お前こそ本当の花嫁だ。」と言われても何の反応も示さないし、結婚式が挙げられることになっても、まったく反応を示さない。また、王子も灰かぶりの同意を得ず、勝手にお城へ連れて行っている。したがって、王子と灰かぶりの結婚は一方的恋愛結婚とみなさざるをえない。

全体のストーリーからしても、灰かぶりが結婚に対して無反応であることはうなずけることである。つまり、継母とその実の娘による継子娘のいじめ、そしていじめられた継子娘が、人が羨むような王子との結婚を実現する、というのがこのメルヘン全体のストーリーであり、結婚は、いじめを受け続けた者の最高の救い、その者への最大の贈物という意味を持っているからである。だから、あえて贈物を欲しがらなくても、それに反応を示す必要もないのである。王子との結婚は、幸か不幸かに関わりなく、庶民の娘にとっては、人生最大の成功、出世の象徴なのである。また、実際に幸せだと叙述されていなくとも、女の子が結婚に対して喜びを表さなくとも、庶民の女の子にとっては、王子さまとの結婚は、幸せの象徴であることに変わりはない。

ところで、灰かぶりは、お金持ちの娘であるが、たとえお金持ちであっても、王子と比べれば庶民の娘である。したがって、王子と灰かぶりの結婚は、王家と庶民の娘との結婚である類型2に属する。

王子と灰かぶりの結婚生活が幸福か不幸かは、まったく描かれておらず、不明である。王子の結婚相手とされた灰かぶりは美しい (schön)。

第4番目はKHM 31の『手なし娘 (Das Mädchen ohne Hände)』である。

貧乏になってしまった粉屋がたきぎを取りに森に行った。その時「まったく見たこともない老人が彼の方へやってきて da trat ein alter Mann zu ihm, den er noch niemals gesehen hatte,」、「おまえが水車小屋の後ろに立ってるものをわしにしてくれると約束するなら、わしはお前を金持ちにしてやろう。ich will dich reich machen, wenn du mir versprichst, was hinter deiner Mühle

steht.」と言った。粉屋は、それはりんごの木だと思い、「よし」と言って「証文を書いて、それを見知らぬ男に渡すことにした。老人はあざ笑って、『3年後にわしのものを取りに来る』と言って、姿を消した。der Müller, sagte 'ja,' und verschrieb es dem fremden Manne. Der aber lachte höhnisch und sagte 'nach drei Jahren will ich kommen und abholen, was mir gehört,' und ging fort.」

家に帰ると、にわかにお金持ちになっていたが、水車小屋の後に立っていたのは、掃除をしていた娘であった。

3年後、悪魔 (der Teufel) が現れた。「娘は体を洗って清め、自分の周りに白墨で輪を書いた。da wusch sie sich rein und machte mit Kreide einen Kranz um sich.」すると、悪魔はどうすることもできず、怒って、帰っていった。

「あくる朝悪魔がまたやって来たが、娘は両手を顔に当てて泣いていたので、両手はまったく清らかだった。Am andern Morgen kam der Teufel wieder, aber sie hatte auf ihre Hände geweint, und sie waren ganz rein.」そのため、また悪魔は娘に近寄れなかった。それで、悪魔は、娘の手を切ってしまう、そうしなければお前を連れて行く、と脅した。

父親は娘に悪魔との約束をうち明けた。娘は「愛するお父さん、私のことは構わないで、お父さんの好きなようになさって。私はお父さんの子ですから。lieber Vater, macht mit mir, was Ihr wollt, ich bin Euer Kind.」と言い、両手を切り取らせた。悪魔がまたやってきたが、娘は手のない腕を顔に当てて長い間泣きに泣いていたので、腕はやはりまったく清らかだった。aber sie hatte so lange und so viel auf die Stümpe geweint, daß sie doch ganz rein waren.」

父親は「わしはおまえのお陰で大きな財産を手にした。おまえを手放すことなく一生涯の上なく大事にするよ。ich habe so großes Gut durch dich gewonnen, ich will dich zeitlebens aufs köstlichste halten.」と言ったが、娘は「ここにずっといることはできません。hier kann ich nicht bleiben:」と言って、旅立って行った。

そしてある王様のお庭にやってきた。「そこには見事な果実が一杯なっている木がいくつもあった。daß Bäume voll schöner Früchte darin standen;」娘は空腹で死にそうなので、一つ欲しいなあ、と思いながら、「主なる神の御名を呼んで、お祈りをした。Da kniete sie nieder, rief Gott den Herrn an und betete.」すると突然、天使 (ein Engel) がやってきて、水門を閉め、お堀の水を干あがらせてくれた。それで、娘は梨を一つ食べることができた。庭師はそれをじっと見ていたが、天使がいたし、女の子を幽霊 (ein Geist) だと思い、話しかける勇気がなかった。

あくる朝、梨が一つ足りないことに気づいた王様は、庭師から事情を聞いた。王様は、不思議なこともあるものだと思い、牧師 (einen Priester) と一緒に、夜番をすることにした。真夜中に女の子 (das Mädchen) が現れたので、牧師が問いかけると、女の子は「わたくしは幽霊ではありません。みんなから見放されております哀れな人間です。でも神様だけには見放されておられません。ich bin kein Geist, sondern ein armer Mensch, von allen verlassen, nur von Gott nicht.」と答えた。王様は「お前が世界中から見放されていても、わしはお前を見捨てたりはしない wenn du von aller Welt verlassen bist, so will ich dich nicht verlassen.」と言い、「女の子を王様のお城へ連れて行った。そしてその子が非常に美しく敬虔だったので、王様はその子を心から愛し、銀の手をこしらえさせ、お后にした。Er nahm sie mit sich in sein königliches Schloß, und weil sie so schön und fromm war, liebte er sie von Herzen, ließ ihr silberne Hände

machen und nahm sie zu seiner Gemahlin.」

それから1年後、王様は戦争に行った。その間に、「お后様は美しい男の子を産んだ。Nun gebar sie einen schönen Sohn.」母君が王様に喜びの便りを出したが、使いの者が途中で寝ている間に、例の悪魔がそれを「お后様を取り替え子を産んだ。daß die Königin einen Wechselbalg zur Welt gebracht hätte.」と書き換えた。「王様はそれを読むと大変驚き、非常に暗澹たる気持ちになった。それでも王様は、自分が帰って来るまで、みんなして后を大事に世話するようにと返事を書いた。Als der König den Brief las, erschrak er und betrubte sich sehr, doch schrieb er zur Antwort, sie sollten die Königin wohl halten und pflegen bis zur seiner Ankunft.」ところが、使者が帰る時寝ていると、またあの悪魔が「后を子供と一緒に殺せ。darin stand, sie sollten die Königin mit ihrem Kinde töten.」と書き換えた。

母君は王様の手紙の内容を信じることができず、また手紙を書いたが、何度やっても悪魔が書き換えるので、真意は伝わらなかった。王様からの最後の手紙には、后を殺し「後の舌と両方の目玉を証拠として取っておけ sie sollten zum Wahrzeichen Zunge und Augen der Königin aufheben.」と書いてあった。それで、「年老いた母君は雌鹿の舌と両目を切り取り、それらをしまっておいた。die alte Mutter … schnitt ihr (einer Hirschkuh) Zunge und Augen aus und hob sie auf.」それから、お后様に事情を話し、「あなたを殺させることはできません。ich kann dich nicht töten lassen,」「あなたの子供と一緒に遠い世界へ行きなさい。geh mit deinem Kinde in die weite Welt hinein」と親切に言った。

お后様は、子供を背中に縛ってもらい、泣きながら出かけて行き、どこかの森の中に入り、「神様にお祈りをした betete zu Gott,」。すると、天のみ使い（der Engel des Herrn）が現れ、お后様を小さな家へ案内した。そこには「ここは誰にも無料の宿泊所 hier wohnt ein jeder frei.」と書いた看板が掛かっていた。その家には、雪のように白い乙女（eine schneeweiße Jungfrau）がいて、親切にお后様のお世話をしてくれた。その家にお后様は7年間いた。そして「お后様の信仰に報いる神様のお恵みで、切り取られた手がまた生えた。durch Gottes Gnade wegen ihrer Frömmigkeit wuchsen ihr die abgehauenen Hände wieder.」

王様は戦場から帰り、母君から本当のことを聞き、妻子が見つかるまで飲み食いもせず捜す、と言って、旅に出た。それから、森へ入り、「ここは誰にも無料の宿泊所」という看板のある小さな家にたどり着いた。そこにいた男の子と女の人が自分の妻子であることは、お后様が持ってきた銀の手でわかった。

そして親子3人は天使のところで御馳走をいただき、それからお年寄りの母君の所へ帰って行った。そこで、「王様とお后様はもう一度結婚の式を挙げ、楽しく（何不足なく）暮らし、安らかに眠った。der König und die Königin hielten noch einmal Hochzeit, und sie lebten vergnügt bis an ihr seliges Ende.」

王様と手なし娘との結婚は、「非常に美しく敬虔な」手なし娘に惚れ、相手の同意も得ずにお城へ連れて行き、結婚式を挙げた王様の一方的恋愛結婚である。

このメルヘンのストーリーは、敬虔な子は悪魔にもうち勝ち、神様のお恵みを得て、幸せになれるということであろう。その幸せの象徴が王様との結婚である。手なし娘は、神様の奇蹟により、切り取られた手も生えて、元通りになり、悪魔の殺害の陰謀にも打ち勝ち、王様と再度結婚式を挙げ、幸せに暮らすことができた。二人の結婚生活は誠に幸せである。

第5番目はKHM 135の『白い花嫁と黒い花嫁（Die weiße und die schwarze Braut）』である。

ある女が、実の娘と継子娘を連れて、野原 (Feld) を通っていたとき、「愛する神様が貧しい格好をして彼らの方へやって来て Da kam der liebe Gott als ein armer Mann zu ihnen gegangen」、道を尋ねた。母親と実の娘は、自分で探せ、と減らず口をたたいたが、継子娘は親切に道案内をした。「それで、愛する神様は母親と娘に腹を立て Da zürnte der liebe Gott über die Mutter und Tochter,」、「お前たちは、夜のように黒く、罪業のように醜くなれ、と呪われた。und verwünschte sie, daß sie sollten schwarz werden wie die Nacht und häßlich wie die Sünde.」他方継子娘には、神様は、望み通り「お日様のように美しく清らかになりたい ich möchte gern so schön und rein werden wie die Sonne;」こと、「決して空になることのない財布 einen Geldbeutel ..., der nie leer würde;」そして「死後の永遠の天国 das ewige Himmelreich nach meinem Tode」の3つの望みを叶えてやった。

継子娘には「レギーナーという名の兄さん Die Stieftochter aber hatte einen Bruder namens Reginer,」がいて、王様の御者 (Kutscher) をしていた。美しいお后様がお隠れになったばかりの王様に、御者が毎日毎日美しい人が描かれた絵を見てばかりいるとの報告が入った。そこで、王様はその絵を取り寄せてみると、「絵の主がどこからどこまで亡くなったお后様にそっくりで、ただ違う点とはといえば、お后様よりもはるかに美しいということだけだったことが分かり、王様は死ぬほど惚れてしまった。als er (der König) sah, daß es in allem seiner verstorbenen Frau glich, nur noch schöner war, so verliebte er sich sterblich hinein.」 「王様は御者から絵の主が御者の妹であることを聞くと、この者以外に誰も后にはしないと決心し、御者に馬車と馬と豪華な金の衣裳を与え、自分の選びとった花嫁を迎えに、御者を使いに出した。Der Kutscher sagte, es wäre seine Schwester, so entschloß sich der König, keine andere als diese zur Gemahlin zu nehmen, gab ihm Wagen und Pferde und prächtige Goldkleider und schickte ihn fort, seine erwählte Braut abzuholen.」 「レギーナーがこの知らせを持って到着すると、妹は喜んだ。Wie Reginer mit der Botschaft ankam, freute sich seine Schwester,」

この幸運 (Glück) を妬んだ実の娘は、非常に怒り、母親に何とかしてくれとせつついた。母親は、魔術 (ihre Hexenkünste) を用いて、御者を半ば盲目状態に (halb blind) し、白い娘 (die Weiße) を半ば耳が聞こえない状態に (halb taub) して、みんなでお城へ向かった。途中で、実の娘と継子娘を交代させ、川の橋の上まで来ると、白い花嫁を二人して川へ突き落とす。花嫁が川底へ沈むと、「雪のように白い鴨が一羽鏡のような水面へ浮かび、川下へ泳いで行った。stieg eine schneeweiße Ente aus dem Wasserspiegel hervor und schwamm den Fluß hinab.」

王様は、連れてこられた花嫁が底抜けに醜い (die grundlose Häßlichkeit) のを見て、大変怒り、「御者を虻や蛇が一杯いる穴の中へ放り込めと命令した。Der König ... befahl, den Kutscher in eine Grube zu werfen, die voll Ottern und Schlangengezucht war.」しかし、「年老いた魔女は、魔術で王様の目をくらまし Die alte Hexe aber wußte ... durch ihre Künste ihm die Augen zu verblenden,」、実の娘と本当に結婚させてしまった。

ところが、白い鴨が一羽、3晩続けてやって来て、料理の見習 (Küchenjunge) にいろいろ尋ねたり、頼んだりしたので、見習小僧は王様にそのことをお話しした。

それを聞いた王様は、自分で確かめようと、そのあくる晩に、台所で待っていると、「あの鴨が排水溝の石の間から頭を突き出した。wie die Ente den Kopf durch den Gossenstein hereinstreckte,」王様はその鴨の首を剣で切り落とすと、「鴨は突然まことに美しい娘になった

da ward sie auf einmal zum schönsten Mädchen,」。そしてその娘はあの絵の主にそっくりだった。王様は大変喜んだ。

魔女とその娘の黒い花嫁は、いわゆる自己裁判で、「服を脱がして丸裸にし、釘を打った樽の中に入れ、樽の前に馬をつけ、世界中引き回す daß man sie nackt auszieht und in ein Faß mit Nägeln legt, und daß man vor das Faß ein Pferd spannt und das Pferd in alle Welt schickt。」という刑に処された。

それから「王様は白い美しい花嫁と結婚をした。Der König heiratete die weiße schöne Braut,」

このメルヘンには、2組の結婚がある。一つは、王様と黒い花嫁との結婚で、もう一つは王様と白い花嫁との結婚である。前者は替え玉結婚である。後者がここの分析対象である一方的恋愛結婚である。とはいえ、後者の結婚の分類は、少々厄介である。王様は、白い花嫁を実際に見もせず、絵を見ただけで、「死ぬほど惚れ」、「この者以外に誰も后にはしないと決心し」、相手の意向も聞かず、絵の主を連れてきて結婚しようとした点では、紛れもなく一方的恋愛である。ところが、当の白い娘がこのことを喜んでいる (freute sich)。しかし、「王様は御者から絵の主が御者の妹であることを聞くと、この者以外に誰も后にはしないと決心し、御者に馬車と馬と豪華な金の衣裳を与え、自分の選びとった花嫁を迎えに、御者を使いに出した。」とあるように、王様は、娘が喜ぼうが悲しもうが、また何の反応も示さなからうが、娘を連れて来て結婚するつもりであったし、事実そうしたのである。つまり、王様は結婚相手の意思を確かめてはいないのである。ただ、娘が王様のこのような一方的な、命令のような強引な連れ去り結婚を喜んで受け入れただけである。しかし、この娘の喜びは、いわゆる恋愛感情ではないであろう。この娘は、自分の結婚相手がどんな人物か、まだ知らないし、顔も見たことがない。会ったこともない。そういう見知らぬ人に恋愛感情を抱くのは不自然である。だから、ここの娘の喜びは、結婚への喜び、それも単なる結婚ではなく、王様との結婚への喜びであろう。また、継母と実の子の虐めから逃れられるという喜びもあったかも知れない。それゆえ、白い花嫁の反応を考慮に入れるにしても、やはり一方的恋愛結婚に分類せざるをえないであろう。二人の結婚をあえて他の種類の結婚へ分類するとすれば、恋愛結婚ということになろう。恋愛結婚を非常に広義に、かつ緩やかに捕えれば、それも可能であろうが、メルヘン全体のストーリーからして、娘に恋愛という側面はないであろう。つまり、ストーリーは、神様に親切であった娘が、神様のお陰で、白く美しくなり、幸運をつかみ、神様をないがしろにした黒い醜い娘とその母（このメルヘンでもいつの間にか魔女にされている）が惨めな結末を迎える、というもので、その幸運の象徴が王様との結婚だからである。ただし、王様と白い娘の結婚にもあらゆる分類に付きものの両生類的な境界線上の曖昧さはある。

2人の結婚生活は、まったく叙述がないので、幸福か不幸か不明である。

### 第3節 類型3の一方的恋愛結婚

これはKHM 126の『誠実フェレナントと不実フェレナント』である。この分析はすでに行ったので省略するが、お后様と誠実フェレナントの結婚は、お后様が夫である王様を殺害し、好きな誠実フェレナントを夫にしたお后様の一方的な恋愛結婚である。これは、嫌いな夫の王様を殺して、好きなフェレナントと結婚するという、いわば猟奇的な結婚である。

## 第2章 『日本の昔ばなし』の一方的恋愛結婚

### 第1節 類型1の一方的恋愛結婚

第1番目は『かえるの報恩』（第Ⅱ巻37ページ）である。

「昔、あるところに長者が娘を三人もっていらした。「ある朝、田の水を見に行くと」、「田に水が一つもかかっていないで、田の稲が干草（ほしぐさ）のようになってい」た。「長者はなにもかも困って、『この田さ水かけてけたものさ、三人の娘のうちどれだ一人嫁こねけるあ』と」言って、戻ってきた。

「つぎの朝また行って見ると、水が水口からどんどんかかってい」た。よく見ると、「下の田のまんなかに稲を分けて、大きな主（蛇）がのろのろと歩いてい」た。長者は「くびくびなって（しおれて）もどって来」た。

「一ばん姉娘が昼飯をもってき来」たが、「お父さま食いたぐなえやね。へだどもさえ、千刈田さ水かけてけた主さ、嫁こねいてけだら飯たべあね」と言った。姉娘は「どこさでも行きますども、主さだけあごめん下せあ」と言い、逃げて行った。「二ばん娘」も同じで、また逃げて行ったので、「またくびくびとなってい」た。「三ばん娘がお膳をもて来」たとき、たのむと、娘は「お父さまのいうことだら、何でもききます。わあ主さ嫁こね行くしけあ、どうが飯あがれ」と言ってくれた。娘は奇妙なことに「針千本と千成ふくべと真綿千枚かって下さい」と言った。

「いよいよ嫁入りの日になり」、三ばん娘は、沼に行き、「千成ふくべの口に真綿をつめ針をさして、一どに沼に投げ入れ」た。「すると、沼の主が出て来て、ふくべを沈めようとして泳ぎまわっているうちに、針にささって死んでし」まった。

娘は、「家にはもどらないで、上り三里下り三里の峠をこえて行」くと、「山の中からのんののんと地響きがして、何だか出て来」た。すると、「見たことのない年とった婆さまに行きあ」った。「婆さまは『姉さま、姉さま。わあこの山のひぎのぎゃろ（ひきがえる）でござしだ、あの主のためね、おらあの孫どあ何ぼが食われただか知れまへん。おかげでこれから日さも風さもあたるねよござあすだ』とお礼をいって」、一人旅は危ないからと、「おんぼの皮をくれ」た。

娘は「おんぼの皮をかぶってある村に来て、そこの長者の家に奉公することにし」た。「ある晩、その家のあえな様（長男）が、みんな休んだあとで一つだけ灯（ともしび）のついている部屋に気づいたので、行」くと、「おんぼの部屋に見たことのない十七八のきれいな姉こが本を読んでい」た。

「そのうちにあえな様は」、「恋の病にかか」った。医者が「家にいる女に、みんな一人ひとりお膳をもたへでやって、飯くった者を嫁こにすればすくなおる」と言ったので、「召使いの女にみんなお膳をもたせて出し」たが、「あえな様は誰のものも食わなかった。」「あとにはもう年よりのおんぼ」しか残っていなかったが、「おんぼでも女だだしけあ」と言い、「湯に入れて、着物を着かえさせ」た。「そうすると、何もかにもきれいな姉さまになった。」「そこでお膳をもたせてやったら、あえな様はすぐ起きて飯をたべ」た。「そこで、娘は長者のところの嫁こになって、安楽にくらした」。

この昔ばなしの長者のあえな様と長者の末の娘の結婚は、解説の必要はない。一方的恋愛結

婚である。ただし、あえな様は、男でありながら、長者という家の重みに押し潰されたのか、自ら好きな人がいるとか、結婚したいという意志表示をしない。二人の結婚生活は幸せである。この昔ばなしの筋は、父の言うことを何でも聞く従順な娘が危険な目にあっても結局幸せになる（ここでは結婚）、ということであろう。この娘は一種の人身御供かも知れない。

第2番目は『白鳥の姉』（第Ⅲ巻の90ページ）である。

「さしゅの国にさしゅの殿さまがあり」、「女の子一人と男の子一人が生まれたところで、奥方は死んでしま」った。「女の子の名前は玉のちゅ、男の子の名はかにはると」いった。

「殿さまは十年のあいだ後妻をもらわ」なかったが、あるとき「ちゅよ、かにはるよ、…お母さんがいないと、ほかの殿さまが来たとき肩身がせまいよ」と言って、妻をさがしに旅立った。

「三日のあいだ方々をさがしてある」いたが、「女はいかにたくさんあっても、妻にしたい女はみつからなかった。ところが、やまだむちぬやしというところに来ると、美しい女が布を織っている」た。「殿さまが『わしは、さしゅの国のさしゅの殿さまですが、妻が死んだので、妻をさがしてあるいているところです。あなたが、妻になってはくれまいか』」と言った。すると、女は「どうかそうして下さい。わたしの夫はやまだむちの殿さまでありましたが、女の子一人生まれたときに死んでしまって、この家屋敷も人手にわたることになっております。それでこうして布を織って暮らしておりますが、あなたが娘と二人つれていって下されば、願ってもないことです。」と答えた。

「そのうちに、玉のちゅがさがの殿さまの嫁にもらわれることにな」った。お嫁入りの前日、お母さんは、玉のちゅを煮えたぎっている湯の中に投げ込み、殺してしまった。「弟のかにはるは、それを見て、息もできないほど泣」いた。ところが、母は夫に言った。「あなたはわるい妻をもったものです。その人の娘といたら、わたしが味噌のこうじを立てようと思っておりますと、わいた湯をあびようとして煮えて死んでしまいました。」「お父さんはそれを聞いて『大変なことをしてしまった。人にくれた子供だが、明日はさがの殿さまになんと返事したらよかろうか』『なんの心配もいりません。かながおりますから、かなに玉のちゅの支度をさせて嫁にやりましょう』と、妻はいいました。けれども、お父さんは胸がいたくなって寝てしま」った。

翌日「さがの殿さまから嫁迎えに来」た。「お父さんは病気で行くことができな」かった。そこで、「母とかなとかにはると三人で行」った。「大へんにご馳走になり」、「帰るとき母は、殿さまに『かにはるは玉のちゅの雇いですから、しかってまい日薪をとらせ、夜はあなたとちゅと二人のはぎ（脛）をもませたり、肩をたたかせるようにして下さい』」といった。「それから家に帰って、『かなはちゅと名をかえて、さがの殿さまにさし上げて来ました』と、お父さんにいい」、「『かにはるはどうした』とたずねたので、『かにはるは、姉がなれないところで淋しがるだろうと思ひまして、七日のあいだついているようにいって来ました』」と、答え」た。

「かなのちゅ」は、かにはるに山へ行って、薪をとって来るように言いつけた。「かにはるは山はどこにあるのか、薪はどうしてとるのかもわからず、しかたなく姉の屍が埋めてある杉の山へ行」った。かにはるが「杉の山のもの、杉の山のもの」と呼ぶと、「白鳥（しらとり）がとび出して来て、杉の枯葉」で、薪を作ってくれた。そして弟の身を案じ、「機屋（はたや）の雨戸のあたりに糸切れや布切れが散らかっているはずだから、それを拾って持って来なさい。姉さんが着物をこしらえてあげるから」と言った。

かにはるが家に帰った次の日、「機屋の雨戸のところ」に本当に「糸の切れや布の切れがあったので、それを拾って杉の山に行」った。そして「杉の山のもの」と呼ぶと、「白い鳥がでて来て」、「糸の切れや布の切れは見つかったかい」と尋ね、今日から三日の間、「頭がいたいと言って」寝なさい、四日目の朝に「もうよくなったと言って、飯をうんと食って山へ来なさい」と言った。

四日目の朝、かにはるが杉の山に行って、「杉の山のもの」と呼ぶと、「白鳥の姉が衣装を風呂敷につつんでくわえてとんで来」た。そして「この衣装をあげよう。家に帰ったらけっしてよいところにおかないで」、「竈（かまど）の前の一ばん汚いたたみの下にかくして」おいて、夜寒くなったら着なさい、そして夜明け前に脱いで「もとのところにしまってお」きなさい、そして「これからはもうわたしを呼んではなりません」と言って、姿を消した。「弟は泣きながら家に帰」った。

「その夜、さかの殿さまはねむれないので」、「煙草の火を入れ」るために、竈の前の「びかびかと光って」いるものを、「火だと思って火箸ではさみあげ」てみた。すると、それは「立派な衣装」だった。殿さまが理由を尋ねると、子供は泣きながら「これまでのことを物語」った。

そして次の日の朝早く、殿さまとかにはるは杉の山へ行った。殿さまは、自分が立っていると「姉は出て来ないかも知れない」と思い、「木の根元にかくれ」た。かにはるが「杉の山のもの」と呼ぶと、「白鳥の姉がとんで来て」、「もうわたしを呼んではならないと、あれほどいっておいたのに。」と言って、弟をしかった。殿さまが出て来て「お前はもとの人間にはもどれぬかね」と言うと、白鳥は「もうどうすることも出来ません」が、あんだの「王さまに相談して見ま」しょう、「とにかく家に帰って、二つの門柱の上に挿鉢を一つずつすえて、そのなかに水を入れておいて下さい。そして白い鳥がとんで来てその中で水をあびたら、庭の築山をさがして下さい。そのときわたしの体はそこにあります。もし門柱の上に挿鉢がすえてなければ、わたしはもとの人間にもどることはできません。」と言った。殿さまが白鳥を「捕らえて見ると蠅が三匹ばかり手の中に残って」いた。

殿さまは家に帰り、白鳥の言ったとおりのことをしておいた。すると、「白い鳥がとんで来て、挿鉢の水をつかってはとび出し、またつかっては飛び出した。」そこで殿さまが「築山に行ってみる」と、「照る日もくもらすほど、とつのみたいほど美しい女が、手水鉢（ちょうずばち）をうしろにして立って」いた。「殿さまはその女を籠にのせて二階へ案内」した。

「わるい妻は殿さまに斬り殺され」た。「母親はなにも知らないでよばれて来て、自分の娘の首を土産の包みにもらって帰」った。「途中で頭がいたんであるけなくなったので、包みをひらいて見ると娘の首だったので、おどろきのあまり気絶して死んでしま」った。

「殿さまはあらためて、玉のちゅと祝言をし」た。「かにはるをつれて、三人でさしゅの国のさしゅの殿さまを見舞いに行きました。行くと、父はみんながぶじなのを見てよろこび、病気もすぐなおりました。かにはるもまもなくよい妻を迎えて親を安心させ、姉弟たがいに助けあい、いまが今までよい暮らしをしているそうであります。」

この昔話には、4組もの結婚がある。まず、「さしゅの殿さま」と「やまだむちの殿さまの妻」との結婚、次に「さかの殿さま」と「かな」との結婚、そして「さかの殿さま」と「玉のちゅ」との結婚、最後に「かにはる」と「よい妻」との結婚である。

さしゅの殿さまとやまだむちの殿さまの妻がここで考察の対象となる類型1の一方的恋愛結

婚である。さしゅの殿さまがやまだむちの殿さまの妻を気に入っていることははっきりしているが、問題はこの妻の気持ちである。見たところ、二人の結婚は恋愛結婚のように思われるが、この妻、結婚に対する意欲はあるが、さしゅの殿さまに対する気持ちがあるのかどうか、非常に疑問である。というのも、彼女は「家屋敷も人手にわたることにな」るほどおちぶれ、「布を織って暮らしており」、もしも殿さまと結婚できたら、生活が上向く、今の窮地を脱することができると思っている、と考えるのが自然だからである。実際、この妻がさしゅの殿さまに対して、いい印象を持ったような叙述は一切ないし、また継子娘の結婚を「立派な殿さま」との結婚ということで、羨み、継子娘を殺してまで、自分の実の娘を結婚させようとしたことを考えると、この妻の意図するところは、さしゅの殿さまという人格と結婚したいというよりも、殿さまという地位と結婚したいということであろう。こういう訳で、この二人の結婚は一方的恋愛結婚に分類することにする。

二人の結婚生活は、最後に生き返るとはいえ、娘が後妻に殺されたり、父親にとっての継子娘が斬り殺されたり、妻が気絶死したりと、あまり幸せとは言えない。

この昔話のストーリーは、さしゅの殿さまとやまだむちの殿さまの妻との再婚から始まる。後妻は継子娘を殺し、実の娘をさかの殿さまと結婚させる。殺された娘は白鳥になり、最後に「照る日もくもらすほど」「美しい」女に生き返って、さかの殿さまと結婚する。このように、この昔話のストーリーは、悪行は結局ばれて、報いを受けるというものである。

さしゅの殿さまが結婚したやまだむちの殿さまの妻は美しい。

ここでは考察しないが、他の結婚について述べると、さかの殿さまとかなとの結婚は替え玉結婚である。そしてさかの殿さまと玉のちゅとの結婚ははっきりと述べられていないので、断定することは出来ないが、おそらく立派な殿さまとの、家と家の利害に基づく政略結婚であろう。最後のかにはるとよい妻との結婚は、話の付け足しで、まったく不明である。

## 第2節 類型2の一方的恋愛結婚

第1番目は『手なし娘』（I巻25ページ）である。

「昔、あるところに、仲のよい夫婦があ」った。「かわいいひとり娘が」「四つとき、母さまは死んでしまい」、「そのあとに、新しい母さまが来たけれども、母さまは継子が憎くてにくくてな」らなかった。

「憎いにくいといっている間に、娘は十五にな」った。「いつも継母のいうことばかり聞いていた」「父さまは」継母にせつつかれ、娘に「きれいな着物をきせて」、祭見に誘った。「娘はたいそう喜んで出かけ」た。父さまは、娘を山の奥へ奥へと連れていき、「ふた山こえた谷間に行くと」、一緒にお昼ご飯を食べた。「ひる飯をたべているうちに、娘はあまり歩いてくたびれたので、いつの間にかいねむりを始め」た。「父さまはこのときだと思って、腰にさしていた木割りで」、娘の両腕を切り落とし、「泣いている娘をそこに残して、ひとりで山を降りてしま」った。「娘は血まみれになって、ころげながら後を追いかけて行きましたが、父さまは後も見ないで行ってしま」った。

「あるとき、立派な若者が馬に乗って、お供をつれてそこを通りかか」った。若者が「そなたは何者だ」と尋ねると、「娘は、『わたしは、まことの父さまからも見すてられた、手なし娘です』」といって、泣き出し」た。その訳を聞いた若者はかわいそうに思って、「なにはともあれ、わしの家にくるがよい」と言い、「娘を馬にのせて山を降り」た。若者は家に帰って、母

さまに「娘の身の上をのこらず語って聞かせ」た。「母さまも、心のやさしい人でしたから、娘の顔を洗ってやり、髪を結ってやり」、「化粧をしてやると、手なし娘はもとの美しい娘になった。「母さまもたいそうよこんで、ほんとうの自分の娘のようにかわいが」った。「それからしばらくたってから、若者は母はさまに、『母さま、母さま。お願いでがんですから、どうかあの娘をわたしの嫁にして下され』と、頼」んだ。母さまは「あの娘なら、お前の嫁によい。」と言って、承知してくれた。それから「すぐに婚礼の祝いをし」た。

「そのうち、娘には子供が生まれることにな」ったとき、「若者は江戸へ上ることにな」った。

「それから間もなく、かわいい男の子が生まれ」た。母さまは、早飛脚を立て、子供の誕生を知らせようとした。「早飛脚の使い走りは、山をこえ野をこえて行ったので、途中でのどがかわいてある家に立ち寄って、水を貰っての」んだ。ところが、そこは手なし娘の生家だった。継母が飛脚に「どこへ行くぞえ」と、聞くと、飛脚は「おらが隣の長者どのの手のない娘が、子供をうんだので、江戸にいる若さまのところへ、早じらせを持って行くところだ」と、答えた。継母は、飛脚を「酒や肴を出してもてなし」て、酔わせ、その間に、「玉とも何ともたえようのない、かわいい男の子が生まれた」という文面を「鬼とも蛇ともわけのわからない化け物が生まれた」と、書き換え、また「そっと文箱の中へ入れてお」いた。飛脚が目覚ますと、「継母はにこにこしながら、『戻りにも必ず寄って、江戸の土産ばなしをきかせてください』と、親切そうにい」った。

若者は飛脚の手紙を見て、「たいそう驚」いた。「けれども『鬼でも蛇でもよいから、私が帰るまで大切に育てて下され』という返事をかいて、早飛脚にもたせて帰し」た。飛脚はまた継母の家に寄り、「酔いつぶれ」てしまった。その間にまた継母は手紙の中身を「そんな児の顔など見たくもない。手のない娘を見るのもいやになった。子供といっしょに追い出して下さい。それでなかったら、おらは一生家には戻らないで、江戸でくらしませう」と、書き換えた。

手紙を読んだ若者の母親は不思議に思い、飛脚に「途中でどこへも寄らなかったかえ」と尋ねたが、飛脚はまっすぐに帰ってきた、と答えた。「それでも、江戸の息子がもどって来てからのことにしよう」と、待っていたが、いつまでたっても帰って来ないので、「母さまは仕方なく、娘に事情を話して聞かせた。「『母さま、この片輪者のわたしにかけて下されたご恩返し一つ出来ないで、出て行きますのは悲しいことだけれども、若さまの心とあればいたしかたありません。出ていきます』』と、娘は子供を負わせてもらって、母さまに分かれて泣く泣く家を出て行」った。

「娘は行くあてもな」く、「足の向くままに」行っただが、喉が渴いたので、「流れのあるところ」で、「ごこんで飲もうとすると、背中の子供がずると背から抜け落ちそうにな」った。「びっくりして無い手でおさえようとすると、ふしぎなことに両方の手がちゃんと生えて、ずりおちる子供をしっかりと抱きとめてい」た。「娘はたいそう喜」んだ。

「それから間もなく、若者は子供や妻や母さまに、早く会いたいと思っていそいで江戸から帰って来た」が、「娘も子供も旅に出たということを知」った。

飛脚の仕業であることがわかった若者は、妻を捜しに旅立った。「流れのそばのお社まで来」ると、「子供を抱いた一人の女乞食が、神さまに一心に祈って」いた。しかし、「両手をもってしているので、若者はふしぎに思いながら声をかけて見」ると、振り返った「女乞食は手なし娘」であった。「ふたりはたいそう喜んで、共にうれし泣きに泣」いた。

「どうしたことか、その涙のこぼれるところには、うつくしい花が咲いた。

「継母と父さまは娘をいじめたのがで、地頭さまに罰せられた」。

長者の若者と手なし娘の結婚であるが、不思議なことに、若者は結婚相手となる娘に対して結婚して欲しいとか、結婚したいとか、あなたも結婚する気があるとか、一切言わず、自分の母親に「母さま、…お願いでがんですから、どうかあの娘をわたしの嫁にして下され」と許しを請うている。そして母親の許しが出ると、「すぐに婚礼の祝」という運びになっている。娘の結婚への意思はまったく無視されている。このように、この結婚は、若者の一方的恋愛結婚以外の何ものでもないが、この話でも、『かえるの報恩』と同じように、若者の意志は背景に退き、代わって「あの娘なら、お前の嫁によい。」というように、母親の意志が前面に出ている。ストーリーは、継子いじめを受ける娘が実の父に手を切られ、さまよっているうちに、長者の息子に救われ、結婚するが、そのまま幸せということには至らず、継母の悪巧み（手紙のすり替え）によって家を出て行かざるをいなくなり、そして最後の最後に夫に見つけられて救われるというものである。

二人の結婚生活は、最後には幸せそうであるが、語られていないので、不明である。手無し娘は「美しい」。

第2番目は『灰坊』（第Ⅱ巻の24ページ）である。

「むかし、おーむらの国のおーむらの殿さまに、男の子が一人生まれたので、名をまみちがねとつけ」た。「まみちがねが三つするとき、母親が死に」、新しく迎えた母親に育てられた。

「まみちがねが九つとき」、父の殿さまが江戸に出てから、継母のいじめが始まった。いよいよ父さまが江戸から帰るといとき、「まみちがねが『母さま、父さまの船を迎えに行きましょう』」といって、『お前はさきに行きなさい。わたしは髪をいって後から行くから』とい、「剃刀で自分の顔に傷をつけて、蒲団をかぶって寝ころんでしま」った。父がまみちがねの「汚いなりを見て」、理由を尋ねると、まみちがねは「母がかまってくれないからです」と答えた。二人が母を待っても来ないので、家に帰ると、母は、あなたの子供に「まい日、こんな継母やつとって、剃刀」で、顔に傷つけられ、「人に見られるのが心ぐるしく、船迎えにも行かなかったのです」と言った。

父は怒って、まみちがねに馬と江戸土産の着物をやり、「家を追い出し」た。まみちがねは馬に乗り、南の方に行った。やがて「長さ千里はば一里の川を前にし」た。「上にも行けず下にも行けず、『まみちがねの馬がとばば見いよ』」とい、馬に一むちあてると、見ごとに、川を渡」った。次に出くわした「白雲を着た茨の山」も馬で「とび越え」た。やがてたどり着いたある村で、まみちがねは、馬は「竹山に放」ち、「長髪をばらばら生やした爺さん」に換えてもらった「うじょー」を着て、「西の頂の長者の家」で、雇ってもらった。まみちがねはこの長者の家の台所係になったので、「灰坊」と呼ばれた。

ある時、主人が「芝居の踊り」に灰坊を連れていこうとしたが、灰坊は「母の死んだ三年目の日です。」と言って、断り、家の留守番をした。そして主人たちが出かけると、灰坊は「風呂に入」り、「一ばん美しい着物をつけ、立派な足駄をはき、竹山の馬をよんで鞍をかけ、「飛んで芝居の南の方に降り」た。

「殿さまも見物人も『天の神さまが来られた。立って拝め』」とい、みんな灰坊を拜」んだ。西の「長者の掬取り娘は、『あれはわが家のへーぼだ、左耳に黒いしるしがある』」とい」ったが、長者は「神さまに無礼なことをいうな、早くとーと（礼拝）せよ」と言った。「娘は笑

いながら礼拝し」た。

灰坊は馬に乗って先に家に帰り、またもとの灰坊の格好をしていた。主人は帰ってくるなり、「今日は天の神さまが芝居の場に来られたので、みんな拝んだよ。」と言った。灰坊が「そんなことでしたか、わたしも行けばよかったに」と言うと、主人は「明後日（あさって）も芝居がある。」と言った。

芝居の日、灰坊が前と同じく芝居を断り、家で「風呂に入って身支度をして馬に鞍をかけてい」と、「娘が、草履を忘れたとうそをいってもどって来」た。灰坊は、仕方なく娘も馬に乗せて、馬に一鞭かけた。すると、「馬はおどって芝居小屋の西の方におり」た。「殿さまも長者どものも、これを見て『今日は神さまは夫婦で来られました』と行って、みんなおが」んだ。

「灰坊と娘はさきに帰り」、後から長者どのが帰ってくると、娘は「腹がいたむ」と言って、大変騒いでいた。「医者を呼ぼうかという」と、娘は『医者はいりませぬ、ゆた（巫女）をよんで下さい』と、たの」んだ。4人目のゆたは「これは持病ではありません。雇っている男の一人に好きな人があります。十七人の男の雇人におもいおもいの支度をさせて、娘に盃をささせて見れば、相手が分かります」と、占った。「長者どのは、十七人の雇人に巫女のいう通りにさせて見ましたが、娘は誰にも盃をさ」さなかった。「『もう、誰もいないかい』と、長者どのが」言った。「汚い灰坊がまだ一人のこっております」「灰坊もお前たちと同じ生れだよ。支度をさせて出して見なさい。」そこで灰坊ということになった。灰坊は、主人が出してくれた「古い衣装」は、風呂上がりの体拭きに使い、「豚小屋に投げすててしま」った。次にくれた「よい衣装」も「立派な羽織」も投げ捨ててしまった。それから、灰坊は「爺さまのところ」に預けてあった衣装を着て、馬に乗ってやって来」た。「長者はそれを見て、手をとって座敷に案内し」た。「娘の病気はすぐなおって、盃をとって灰坊にさし出し」た。

「長者は『わしは娘のように目がなかった。どうかこの家の聾になって下さい』と、頼みました。それから結婚式が始まりました。」

3日祝いが続いた後、4日目に、聾が「親げんど（親見舞）に行行って来ます」と言ったとき、妻は「山道を行くと馬の前鞍に桑の実が落ちますが、どんなに水がほしくても決してたべてはなりません。桑の実をたべるともう二人は、逢うことが出来なくなります。」と言った。

山道を行くとき、まみちがねは、妻の言ったことも聞かず、桑の実を食べた。「すると、まみちがねはすぐ死んで、馬の頸に倒れてしま」った。「馬は死んだまみちがねを乗せ」、まみちがねが生まれた家に着くと、「ひんひんと三たびいなな」いた。「父はそれを聞いて、『あれはまみちがねの馬だが、父さまと呼ぶ声もなし、馬に三声いななかせるとは、ふしぎなことだ。行って見ておいで』と行って、母親を見せにや」った。「母親が門をあけると、馬はいきなり、母親を喰い殺してしま」った。「父親もすぐ行って見」た。父親は『『生きて帰って来ずに、死んで帰るとはどうしたことだ』と行って、まみちがねを酒樽の中に入れてふたをかぶせ」た。

まみちがねが「三日たっても帰っても来ない」ので、「まみちがねの妻は、きっと桑の実を食べたにちがいないと思って、しじゅうの水（死んだ者を生かす水）を三合買って、宛てもなく出かけ」た。「まみちがねの馬が一日かかった道を、半日で歩いてまみちがねの家の門に行」った。そしてまみちがねの「屍に水を浴びせて、しじゅうの水で拭いてや」と、「まみちがねは『朝寝どしやーる 夕寝どしやーる』と行って、生きかえ」った。妻が、朝寝や夕寝ではありません、「食べてはならぬといった桑の実を食べて、死んだのです。わたしはしじゅうの水であなたを生き返らせたのです。さあ、家へ帰りましょう」と言って、まみちがねを家へ連れて帰

ろうとすると、父親が一人息子だから「ほかへやることは出来ません」と、断った。すると、「まみちがねは、『わたしはいっしょに二人の父を養うことは出来ません。金を送りますから、父さまはよい養子を迎えて下さい。わたしは命を救ってくれた妻の家で働きます』といて、二人は父親に別れて家に帰った。

「それから、今が今までよい暮しをしているようであります。」

まみちがねと長者の娘との結婚は、殿さま家と長者の家との結婚であり、機械的に分類するとすれば、「類型1」になるが、長者といえども、殿さまに比べれば、身分が低く、したがって、殿さま家と庶民の結婚という「類型2」に分類しなければならない。

そしてまみちがねと長者の娘の結婚であるが、恋の病に陥った長者の娘がまみちがねが「好き」だったことはよくわかる。では、まみちがねの方はどうであろうか。「長者は（まみちがねに）『わしは娘のように目がなかった。どうかこの家の聳になって下さい』と、頼みました。それから結婚式が始まりました。」とあるように、まみちがねは、娘の父親からの頼みに、まったく何の反応も示していない。にもかかわらず、結婚式が挙げられている。まみちがねは、男であり、しかも殿さまの子、若様である。自分が娘が好きで、結婚をしたいのであれば、自分の方から言い出すことの出来る立場にある。実際、まみちがねは、生き返った後、妻が「さあ、家へ帰りましょう」と促したのに対し、「これはわたしの一人息子です。ほかへやることは出来ません。」と言う父親の殿さまに、「わたしはいっしょに二人の父を養うことは出来ません。…わたしは命を救ってくれた妻の家で働きます」と、父親の面倒を見ることをきっぱりと断っている。つまり、意志表示をしようと思えばできるのである。それにもかかわらず、まみちがねは、娘に対する気持ちをまったく表明しない。沈黙したままである。まみちがねの結婚への意思、感情は分からないままである。だから、まみちがねと長者の娘の結婚は、娘の一方的恋愛結婚である。

二人の結婚生活は「幸せ」である。

『灰坊』のストーリーは、継母にいじめられ、家を追い出され、長者の家の飯炊きとして雇われた灰坊（若様）が、美しい着物を着、立派な馬に乗り、芝居の席に出て、長者の娘の目を引き、長者の娘と結婚するが、妻の禁を破って死に、妻の助力でまた生き返り、幸せに暮らすというものである。長者の娘の目を引く灰坊のその振舞いは、金色と銀色の衣裳、それ以上の華やかな衣裳、誰も手にしたことのないような豪華な衣裳に次から次へと着替え、王子の気を引き、王子と結婚することになった、グリム童話の灰かぶりの男版とも言える。『灰坊』では、長者の娘の容貌についての語りはまったくない。

第3番目は『べに皿かけ皿』（第Ⅱ巻の141ページ）である。

「むかし、あるところに紅皿とかけ皿の姉妹がありました。」「紅皿はさきの母の娘で、かけ皿はあとの母の子供で、」「紅皿は正直で気立てのやさしい娘であったが、かけ皿の母親はいつも紅皿をにく」んだ。

ある日、「紅皿には底のない袋」を「かけ皿にはよい袋」を持たせ、山に栗拾いにやった。「そして『この袋が一ぱいになるまでは帰ってはいけないう』と、いいつけ」た。かけ皿の袋はすぐに一杯になり、帰ってしまったので、紅皿は一人で「一生けんめいに」栗を拾い、日が暮れてしまった。帰るわけにもいかず、「足の向くままに歩」いて行くと、「灯（ともしび）が見え」た。「行って見ると、一人の婆さまが糸を紡いで」いた。宿を頼むと、婆さまは「泊めてやりたいけれど、息子は二人とも鬼だよ、喰われるから、「帰る道を教えてやろう」と言っ

て、道を教えてくれ、「それから袋に粟を一ぱいと、小箱と一握りの米とをくれ」た。そして「粟は母さまに証拠をもって行きなさい。この子箱は何でも欲しいものがあるとき、その名をいって三度たたけば出る小箱だよ。それから途中で鬼の息子にあったら、米をかみくだいて口の周りに塗って死んだふりをしなさいよ」と、教えてくれた。

紅皿は帰る途中で、「赤鬼と青鬼」に出くわしたので、婆さまに言われたとおりにすると、鬼は「だめだ、兄貴、腐っている。口には虫が一ぱいだ」と言って、通り過ぎていった。「家では継母が、昨日の晩、あの紅皿が狼に喰われて死んでしまったろうといっているところに」、紅皿が「粟を袋一ぱい拾って帰っ」てきた。それで、「継母もしかることが出来」なかった。

「それから、ある日、村に芝居がかか」った。継母は紅皿に仕事を言いつけ、「かけ皿をつれて、芝居を見に行」った。「すると、友だちがやって来て」、「仕事を手伝ってやるから」、芝居を見に行こうと、誘ってくれた。紅皿は、小箱から出した「きれいな着物」を着て、友だちと一緒に芝居見物に行った。「かけ皿は、母親に菓子をくれとせがんでい」た。「紅皿はすぐ菓子を投げてや」った。「芝居見物に来ていた殿さまがこのようすを見てい」た。

「その翌日、にぎやかな殿さまの行列が村にやって来」た。「そして殿さまの駕籠が紅皿の家の前でとま」った。「母親はたいそう喜んで、かけ皿を着かざらせて迎えにや」ったが、殿さまは「ここには、娘が二人いるはずだから、もうひとり出せ」と言った。「継母は紅皿をむりやりに風呂桶のなかにつまこんでいましたが、殿さまの言葉で、仕方なく出してつれて来」た。紅皿は「たいそう見すばらしい姿をしてい」た。殿さまは「この二人のうちで、昨日、芝居に行ったのは誰だい」と尋ねたので、母親が「このかけ皿でございます」と答えた。殿さまは違うと言い、「盆の上に皿をのせて、皿の上に塩をもって、それに松葉を一本さして、これを題にして歌をつくって見よ」と言った。

かけ皿は大声で、

「盆の上に皿をのせ 皿の上に塩をのせ

塩の上に松をさして おおつかい棒あぶない」

と詠み、「殿さまの頭をぼんと叩いてとんで行」った。

次は、紅皿はが詠んだ。

「盆皿や 皿ちゅう山に雪ふりて 雪を根としてそだつ松かな」

「殿さまはこの歌をきいて大そうほめ」た。「すぐ支度をととのえて、立派な駕籠にのせて、御殿へつれて行」った。

母親は、「かけ皿を空ごもに乗せて」、御殿へ「引っぱって行」ったが、「あまりむやみに引っぱるので、深い溝のなかにころげ落ちて死んでしまった」。

以上で明らかのように、殿さまと紅皿との結婚は、殿さまの紅皿に対する一方的恋愛結婚である。紅皿の考え、意思、感情は一切語られていない。殿さまが紅皿をお嫁さんにしようと思ったのは、よくある、紅皿が美人だ、というのではなく、紅皿の心根が優しいからである。それは最初に紅皿の特徴を「正直で気だてのやさしい娘」だと、語っていることと符合する。さらに、紅皿に歌の教養があったということも、殿さまの気に入るところとなつたであろう。

この昔話のストーリーは、グリム童話によく見られるようなストーリーで、継母にいじめられる紅皿という「正直で気だてのやさしい娘」が殿さまと結婚してハッピーエンドとなるというものである。だから、この話では、結婚が善良な子の最高の報い、報償であり、この話のなくてはならない結末となっている。

二人の結婚生活が幸福か不幸かはまったく語られていないので、不明である。

紅皿が美しいかどうかは、まったくわからない。そのような語りが無いからである。

第4番目は『鬼のむこ』（第Ⅱ巻の151ページ）である。

「昔、むかし、あるところに娘を三人もったおなごだち（寡婦）がくらししていた。「姉の名はあわめんかしら（赤目の頭）といい、末娘はおとまだるかなと」いった。

「小雨のふる日、母はひとりでは（畑）に出かけ」た。畑仕事をしているうちに大雨になり、「途中の小川はたちまち大水が出てわたれなくな」った。困っていると、「鬼がやって来て」、娘を一人嫁にくれたら、川を渡してやる、と言ったので、「おなごだちはしょうなく『おー』と答え」た。鬼は「いつか雨の降る日に娘を迎えに来る。そのとき娘をやらぬといたら、お前の命はないぞ」と言って、姿を消した。

母が家に帰ると、娘たちは安心したが、母は「座について食事をあげても、口にしようとも」しなかったので、長女は「ぬが、あんま（どうした、母）」と尋ねた。そこで、「母はその日の出来ごとをのこらず、娘たちに話して聞かせ」た。「長女のおとまだるかしらは、『ばー、糞喰れ、うら、行くば（お前いけ）』とどなりつけ」た。次女も同じであった。「末娘のおとまだるかな」は、「おー、あんま（母）。あんまのいいつけでありましたら、何でもききます。…鬼のじょうしきべ（雑色部、妻）になれば、お母さんがいわれるなら、喜んで鬼のところへも行きましよう」と言って、承諾した。

「約束の日に鬼がやって来」た。鬼は「嫁かなとったい、とったい」と喜び、おとまだるかなを抱き上げて、雨で洪水の川を渡りかけた。しかし、鬼は途中で「早瀬に足をふみはずしてつまずき」、「急流におし流されて深い淵にまきこまれ、もがきながら…死んでしま」った。末娘は、鬼の頭から「うまく岸にとび上がり」、助かった。

「おとまだるかなは災難をのがれて、岸でどぎまぎしていると、あじがなし（殿さま）がきて、「ことのしだいをきいてたいそう感心して、それではこんどはわたしの嫁になれ」と言った。「それから、おとまだるかなはあじがなしの嫁になって、あじがなしのとのち（館）につれて行かれ、この世でのなやかな暮らしをすることにな」った。

「里に帰ってこれまでのことを母親に知らせると、たいそう喜」んだ。「ところが、姉のおとまだるかしらは、その話を聞いてうわなり（嫉妬）をしだし」た。おとまだるかなが帰る日、姉は妹を送ると言い、泉のそばまで来ると、妹を「泉につき落として殺してしま」った。そしておとまだるかなの着物を着て、「おとまだるかなになりすましてとのちに帰」った。

あわめんかしらが水をくみに泉に行くと、「殺されたおとまだるかなが鰻（うなぎ）になって」、暴れるので、「水がにごり、とてもくめな」かった。それを聞いたあじがなしが行くと、「泉の水がきれいにすんで、中に大きな鰻がよこになってい」た。「あじがなしが捕らえようとすると、おとなしく手の中に入」った。「あじがなしはそれをもって帰り料理をさせ」、「食べようとすると、生にえて食べれなかった。そこで女に小言をいうと、茶碗のなかの鰻が口をきき出し、「頭が煮えているか、煮えていないかわかるあなたが、どうして自分の刀自（とじ、妻）が代わっているのがわからないのですか」と言った。

「あじがなしははじめてほんとうのことがわかり、たいそう悲し」んだ。あわめんかしらは、恥じて「とどろ虫になった」。「いまでも生煮えの料理をあじがなし料理というのは、こんないわれがあるからだそうである。」

さて、この『鬼のむこ』のあじがなしとおとまだるかなの結婚は、あじがなしが「ことのし

だいをきいてたいそう感心して、それではこんどはわたしの嫁になれ」と言い、結婚したのであるから、あじがなしのおとまだるかなへの一方的恋愛結婚である。おとまだるかなの考え、意志、感情は一切語られていない。

二人の結婚生活は、妻のおとまだるかなが殺され、不幸である。

話のストーリーは、親に従順で素直な末っ子（娘）が、お殿様のお嫁さまになり、それを妬んだ姉に殺されるというものである。一方的恋愛結婚は、末娘の善行の最高の報い、褒美の象徴となっている。

お殿様にお嫁入りする、おとまだるかなの容貌は語られていない。性格が「やさし」い、ということぐらいである。

第5番目は『米ぶき栗ぶき』（第Ⅲ巻の85）である。

「むかし、米ぶきと栗ぶきという二人の姉妹があ」った。「米ぶきはさきの母さまの子で、栗ぶきはあとの母さまの子供であ」った。

「ある日、継母はふたりを栗ひろいにや」った。米ぶきのは「破れ袋」で、栗ぶきのは「よい袋」であった。「二人は山へ行って栗をひろ」ったが、米ぶきの袋は穴があいているので、一杯にならず、「木の皮はぎの爺さま」に「袋をつくらしてもらい」、やっ一杯になった。しかし、日が暮れてしまった。

「山道に迷っていると、向こうにあかりがぴかぴかと見え」た。行くと、「一軒家があ」った。そこにいた「婆さま」にどうしてもと宿を頼むと、婆さまは「泊めてやるが、いまに太郎と次郎が帰って来ると、食われるから、おれの腰元さ入って寝ろ」と言った。太郎と次郎が帰って来ると、「人くさいな」と言ったが、婆さまは鳥を食ったからだ、と答え、その日は無事であった。

あくる朝、太郎と次郎が外へ出ると、婆さまは「火箸を渡し」、「おれの頭のしらみ、とってけろ」と言った。「とかげみないな、大きなしらみがうじゃうじゃいるので、栗ぶきは恐ろしがって」とらなかつたが、米ぶきは「しらみをとって火にくべて殺し」た。婆さまは、お礼に米ぶきに「小さな宝箱」をくれた。「栗ぶきには豆炒りをや」った。帰る途中、「太郎と次郎に見つか」り、「追いかけれ」たので、「豆炒り」を投げ、「大きな山」と「大きな川」を呼び出して逃げ、「やっとのことで、家に帰」った。

家で、母さまが栗をゆでてくれたが、米ぶきには「虫食い栗ばかり」やっしたので、栗ぶきがこっそり米ぶきに「よい栗をころがしてや」った。

ある時「町に祭りがあ」った。「ママ母は、米ぶきに『おれはな、栗ぶきと祭見に行くで、留守をしている。そして目籠で据風呂に水くんで、栗十石ついておけ』といつつけて、栗ぶきをつれて祭見に出かけ」た。

籠から水が漏れて困っていると、「旅の和尚さま」が「衣の片袖を裂いて目籠を包んでくれ」、水を一杯汲むことが出来た。また栗は、たくさんの「雀」がやってきて手伝ってくれた。隣の娘が祭見に誘いに来たが、米ぶきが断ると、是非と言って聞かないので、行くことにしたが、着物がなかった。「山姥からもらった宝箱のことを思い出して開けて見ると、きれいな着物や足袋（たび）が入ってい」た。そして二人で「祭見物に出かけ」た。

祭見物の途中、「米ぶきは下の栗ぶきに、まんじゅうの袋をぶん投げてや」った。

「栗ぶきと母親がかえって来て」、「面白かつた」祭の話をしているところへ、「米ぶきを嫁にほしいと行って来」た。継母が『「米ぶきは、髪でば糞蛇ながしたようだし、着物もなにも

もたないから、粟ぶきの方をもらって下さい』という頼りだったが、「その人はなんといいても、米ぶきがほしいといってきき入れ」なかった。

米ぶきは、「宝箱」に入っていた「嫁入衣装」を着て、「駕籠ののって嫁にもらわれて行」った。

「粟ぶきは、これを見てたいそう羨ましがって、『おれも駕籠さのって、嫁に行きたいなあ』といったが、誰も貰い手は」なかった。「母親はうらやましがって、粟ぶきを臼にのせて、田の畦を引っぱって行」った。ところが、「臼がごろごろとこけて、ふたりとも田の中に入ってしまった」った。「そうして、『うらやましいであ うらつぶ』と、歌いながら、つぶつぶとそのまま水の中に沈んで、ふたりはうらつぶ（宮入員）になってしまった」

この誰か分からない人と米ぶきの結婚が一方的恋愛結婚である。この人は何者かよく分からないが、米ぶきが「駕籠ののって嫁にもらわれて行き」、粟ぶきと母親がそのことを度を超して羨ましがっているのが、その人は恐らく長者か殿さまであろう。それゆえ、一方的恋愛結婚の類型2に分類する。また、この人が米ぶきのどこが気に入ったのかもはっきりしない。あくまで推察にすぎないが、この昔話の結婚に至る経緯は、あの『べに皿かけ皿』と非常によく似ており、それも参考にすると、祭に来ていた米ぶきの姿や妹に「まんじゅうの袋」を投げてやる、優しい行いを見て、惚れたのであろう。

二人の結婚生活が幸福か不幸かは、まったく語られておらず、不明である。

米ぶきの容姿については何も語られていない。また、どういう性格かもあまりはっきりしない。「山姥」のしらみをとってやったり、妹にまんじゅうをやったり、恐らく米ぶきは優しいのであろう。

ストーリーは、継母からいじめを受ける米ぶきが最後には幸せになる（結婚）というものであるが、この昔話の特異な点は、『お月お星』とおなじであるが、実の娘（ここでは妹の粟ぶき）がいじめに荷担しないばかりか、実に優しいということである。

この一方的恋愛結婚も、どういう結婚かが分からない故に、逆説的に、結婚というものが幸せの象徴となっている。

以上で、グリム童話と『日本の昔ばなし』の一方的恋愛結婚をすべて見てきた。それらを表にすると、次のようになる。

		グリム童話							
		一方的に愛する主体は誰か	愛する人の態度	恋人	惹かれたところ	家の利害	結婚への親の反対	結婚生活の幸不幸	結婚がテーマか
類型1	6羽の白鳥 49	王様、主体的	強引だが、愛の告白	お姫様	so schön	無	無(母) 娘には父王と継母	幸福	×兄弟愛と魔女の娘の継母による迫害(白鳥にする)
	千種皮 65	王様、主体的	お前はわしの花嫁だと言って結婚する	お姫様	so schön	無	無 娘には父王	幸福	△父王の求婚を避け逃げた娘の運命
	誠実フェレナントと不実フェレナント 126	王様、主体的	略奪	王女	不明	無	無 不登場	不幸	×一挿話 誠実な男の成功譚
類型2	聖母マリアの子 3	王様、主体的	お城に来る意志を確かめ、その後好きになり、結婚	樵の娘	schön und holdselich wunderschön	無	無 娘には貧しい父母	幸福	×マリアの教え：罪を悔い、告白する者は許される
	森の中の3人の小人 13	王様、主体的	一緒に行く気があるか確かめている	継子娘	so gar schön	無	無 娘には父と継母	不明	×継子いじめと継子の成功譚
	灰かぶり 21	王子、主体的	灰かぶりを花嫁にすると言って連れて帰る	継子娘	schön	無	無(父)：娘には裕福な父と継母	不明	×継母と実子による継子いじめと継子の成功譚

類型2	手なし娘 31	王様、主体的	娘に同情し、城に連れて帰り、結婚	粉屋の娘	so schön und fromm	無	無(母)娘には貧しい父母	幸福	△敬虔な娘の数奇な運命と成功
	白い花嫁と黒い花嫁 135	王様、主体的	相手に相談せず、勝手に花嫁を決める	継子娘	schönst	無	無:娘には継母と実の兄	不明	×継母と実子の敬虔な継娘殺害と娘の再生・幸福
類型3	誠実フェレナントと不実フェレナント 126	お后様 主体的	淡々と結婚する	落ちぶれ者の子	不明(顔?)	無	無:夫には貧しい父母	不明	×誠実な男の成功譚
日本の昔ばなし									
類型1	かえるの報恩	長者の長男 主体性無し	恋の病にかかり、家が世話する	長者の末娘	きれい	有る	無:娘には長者の父	幸福	△長者の父に従順な末娘の成功譚
	白鳥の姉	殿さま 主体的	相手の意志を確かめ、結婚する	木亡人の奥方	美しい	無	無 不登場	不幸	×継子殺害で実子を玉の輿に、継子の再生と幸福
類型2	手なし娘	長者の若者 主体性無し	同情し、家に連れて帰り、母に結婚を頼む	継子娘	生活ぶり? 美しい	有る(母)	無(母)娘には父と継母	不明	×虐待された継子娘の数奇な運命と成功譚
	灰坊	長者の娘 主体性無し	恋の病にかかり、長者が世話する	殿様の息子	立派さ?	有る	無:父と継母娘には父	幸福	×継母の陰謀で家を追い出された男子の成功譚
	べに皿かけ皿	殿さま 主体的	予め相手を決め、歌を褒め、連れて帰る	継子娘	優しさと歌の心?	無	無 娘には継母	不明	×継母による継子いじめと継子の成功譚
	鬼のむこ	殿さま 主体的	わしの嫁になれと言ひ、結婚	寡婦の末娘	母親思いの優しさ	無	無 末娘に母	不幸	×親に従順な末娘の出世と嫉妬した長女による殺害
	米ぶき粟ぶき	長者か殿様? 主体的	米ぶきを嫁に欲しいと言って連れて帰る	継子娘	優しさ?	無	無 娘には継母	不明	×継母による継子いじめと継子の成功譚

### 第3章 グリム童話と『日本の昔ばなし』の一方的恋愛結婚の比較とそれぞれの特徴

表を見ると、次のようなことが分かる。

まず第1に、一方的恋愛結婚では、一方的に恋愛感情を抱き、相手の意思を確認せず結婚しようとする者は、社会的、経済的、政治的な地位が相手より上の者だということである。例外は『灰坊』だけである。これは、身分の低い女性(長者の娘)が身分の高い男性(まみちがねという名の殿さまの息子)に一方的に恋をし、結婚する話である。これは確かに異例であるが、『灰坊』では、まみちがね(若殿)は社会的に有力な長者の家の奉公人、つまり台所人(灰坊)であり、身分の高い女性が自分の家の奉公人である身分の低い男性に一方的に恋をして結婚する設定になっている。だから『灰坊』もストーリーとしては、上記の例に漏れるものではない。例外とは言えないのである。また、『灰坊』の場合、長者の娘は、身分の高い男性の場合に見られるように、一方的に、もしくは保護者か主人のように、有無を言わず御殿に連れて行ったり(『べに皿かけ皿』)、それが当然のごとくに、わたしの嫁になれ(『鬼のむこ』)、と言ったり、相手の意志や感情を確かめもせず、「なんといても」嫁に「ほしい」と言って、本人が直接家に来たり(『米ぶき粟ぶき』)するのではなく、恋する心を誰にもうち明けず、いわゆる「恋の病」にかかって、周囲のものがあわてふためき、病を治そうと必死に努力して、やっと結婚に至るというものである。女性は非常に控えめだし、言葉を通じた意思表示も殆どしていない。だから『灰坊』は、話としても、例外的な奇抜な印象を与えない。

第2に、一方的に惚れ、結婚しようとする者は、男性であるということである。例外は『誠実フェレナントと不実フェレナント』(類型3)と『灰坊』である。特に類型1では、グリム童話も『日本の昔ばなし』もすべて男性が一方的に女性に惚れて結婚している。類型2も『灰坊』を除いてそうである。一方的恋愛結婚は、相手の意思、感情、人格を無視した結婚なので、

どうしても政治的、経済的、社会的に、そして家庭内において力のある者がそのような行動に出るのであろう。王家と王家、殿さま家と殿さま家、長者と長者の結婚の類型1では、それが男性ということになる。王家、殿さま家、長者の男性と庶民の女性の結婚である類型2では、当然それは男性である。例外である『灰坊』では、すでに述べたように、話は、女性が長者の娘、男性がその家の奉公人という設定であり、女性の方が男性よりも有力者（話の設定では類型3）だからである。『誠実フェレナントと不実フェレナント』（類型3）も男性よりも女性の方が身分が上であり、『灰坊』と事情は同じである。

では、次に、一方的に結婚しようとする者の態度を見てみよう。

まず最初はグリム童話である。『6羽の白鳥』では、王様は、森の中の木の上にお姫様をお城に連れて帰り、「この者とわしはどうしても結婚したい。世界中探しても他に誰もいない。」と言って、数日後に結婚した。『千種皮』は、灰かぶりに似たところがある。お日様のような黄金の衣装、お月様のような銀色の衣装、お星様のような輝く衣装へと、次々に衣装替えをして祝宴の舞踏会に現れる台所女（灰かぶり）に、王様は「お前はわしの愛する花嫁だ。もうこれからは、互いに離れることはないぞ。」と言って、相手の意思を確認せず結婚する。『誠実フェレナントと不実フェレナント』の類型1の結婚では、王様はいわばお姫さまを略奪する。『誠実フェレナントと不実フェレナント』の類型3の結婚では、「王様は葬られ、お后様は誠実フェレナントと結婚した。」と、淡々とした描写となっている。『聖母マリアの子』では、王様は「お前、わしと一緒にわしのお城に来る気はないか」と相手の意思を確かめ、女の子をお城に連れて帰り、「女の子は話すことはできなかったけれども、非常に美しく可愛らしかったので、王様は心から女の子が好きになり、間もなく女の子と結婚した。」「森の中の3人の小人」では、王様は「わしと一緒に行く気はないか。」と相手の気持ちを聞いて、お城に連れて帰り、すぐに結婚式を挙げる。『灰かぶり』では、王子は「この金の靴が足にぴったりと合う者以外は私の花嫁にしない。」と言って、灰かぶりをお城に連れて帰り、結婚する。『手なし娘』では、王様は女の子の身の上話を聞き、「お前が世界中から見放されていても、わしはお前を見捨てたりはしない。」と言って、同情して女の子をお城に連れて帰り、「非常に美しく敬虔だったので」、「心から愛し」、「お后にした。」「白い花嫁と黒い花嫁』では、「王様は御者から絵の主が御者の妹であることを聞くと、この者以外に誰も后にはしないと決心し、御者に馬車と馬と豪華な金の衣裳を与え、自分の選びとった花嫁を迎えに、御者を使いに出し」、結婚する。

次は『日本の昔ばなし』である。『かえるの報恩』では、長者の長男は恋の病にかかり、長者の家が長男の恋人を探し出して、嫁にする。『白鳥の姉』では、殿さまは「妻になってはくれまいか」と相手に尋ねて結婚する。『手なし娘』では、若者は手なし娘と同じ屋根の下に暮らすうち、娘の暮らしぶりから娘が好きになったにもかかわらず、当の娘ではなく、母親に「母さま、母さま。お願いでがんすから、どうかあの娘をわたしの嫁にして下され」と頼む。そうすると、母親が「あの娘なら、お前の嫁によい。」と言って、二人の結婚が実現する。『灰坊』では、長者の娘が恋の病にかかる。そこで長者は恋人探しをする。恋人を捜し当てると、長者は「どうかこの家の聲になって下さい」と頼んで、結婚という運びになる。『べに皿かけ皿』では、殿さまが紅皿の歌を褒め、御殿へ連れて行く。『鬼のむこ』では、殿さまが末娘に「わたしの嫁になれ」と言って、結婚する。『米ぶき粟ぶき』では、身分の高いと思われる者が米ぶきの家に来て、結婚したいと思っている米ぶきではなく、米ぶきの継母に「米ぶきを嫁にほしい」と言い、実の娘粟ぶきを嫁にすすめる母親を振りきり、米ぶきを駕籠に乗せて連れ

て帰る。

結婚しようとする者の態度で、グリム童話と『日本の昔ばなし』の決定的な違いは、相手に一方的に惚れ、一方的に結婚しようとするほどに積極的な気持ち、愛情があるのに、『日本の昔ばなし』では、その当事者が自らの思いを相手に打ち明けられないということである。家の力を借りたり、母親に結婚の許可を申し出たりする。一言で言って、主人公に主体性がないのである。そんな話はグリム童話には1話もないのに、『日本の昔ばなし』には半数近く(3話)もある。『かえるの報恩』の長者のあえな様は、娘に対する自分の恋心、結婚したい気持ちを、相手にも親にも言うことができず、恋の病にかかって、無言のまま家の助けを借りる。つまり、あえな様の一方的恋愛ではあるが、実質的には、家が一方的に結婚を決めているようなものである。『手なし娘』の長者の若者にいたっては、一方的に惚れて結婚しようとする相手に対して、結婚の許可を申し入れず、「母さま、母さま。お願いでがんですから、どうかあの娘をわたしの嫁にして下され」と、実の母親から結婚の許可を得ようとする。「あの娘なら、お前の嫁によい。」と母親から許可が出ると、すぐそばに結婚相手がいるのに、何の言葉もかけず、「すぐに婚礼の祝い」をする。娘にまるで意思がないかのようなのである。『灰坊』の長者の娘も恋の病にかかる。恋の病は誰しもがその主張を聞かざるをえない。そこで、父親の長者が「どうかこの家の聲になって下さい」と頼んで、結婚ということになる。このように、一方的な恋愛結婚の場合ですら、『日本の昔ばなし』では、主人公に消極的な態度、それも恋する相手というよりも、むしろ家に対する消極的な態度が目立つ。話の随所に、家の利害、家の支配が顔を覗かせる。グリム童話の『手なし娘』と『日本の昔ばなし』の『手なし娘』、グリム童話の『灰かぶり』と『日本の昔ばなし』の『灰坊』はよく似た話であるが、一方的に結婚しようとする者の態度は決定的に違う。グリム童話の『手なし娘』では、王様は娘を「心から愛し」、「お前が世界中から見放されていても、わしはお前を見捨てたりはしない。」と、はっきりと心中を吐露するが、『日本の昔ばなし』では、長者の息子は、無言のまま恋の病に陥り、家の助けを借りてようやく結婚ということになる。『灰かぶり』では、王子は気に入った舞踏の相手を3人姉妹の中から特定し、お前を「私の花嫁にする」と公言するが、『日本の昔ばなし』では、『灰坊』の主人公(長者の娘)は恋の病にかかり、家を騒動に巻き込み、家に婿捜しをさせる。そして最後は、本人ではなく、家(家父)が相手に求婚して、やっと結婚が実現する。これらが、第3番目に指摘できる、グリム童話と『日本の昔ばなし』の特徴と相違である。

第4番目として、結婚相手のどこに一方的に惚れたかを見てみる。

グリム童話では、惚れたところは、すべて美しさである。ただ一つ『誠実フェレナントと不実フェレナント』だけは、どこに惚れたか分からない。特に王様が王女のどこに惚れたかはまったく分からない。お后様が誠実フェレナントのどこに惚れたかも分からないが、「王様には鼻がないので、お后様は王様が好きになれず、誠実フェレナントの方に好意を寄せた。」とあるので、お后様は恐らく外見に惹かれたのであろう。

ところが、『日本の昔ばなし』では、美しさに惚れた話は『かえるの報恩』と『白鳥の姉』の2話しかない。後は、どこに惚れたかがよく分からない。『手なし娘』では、恐らく娘の生活ぶりであり、『灰坊』では、恐らく男の立派さであり、『べに皿とかけ皿』では、恐らくべに皿の心の優しさと歌心であり、『鬼のむこ』では、恐らく末の娘の母親思いの優しさであり、『米ぶき粟ぶき』では、恐らく米ぶきの優しさであろう。

そうすると、娘(男性の場合が1例)が高貴な身分の男性(女性の場合が1例)を惹きつけ

るのは、グリム童話では、美しさであり、『日本の昔ばなし』では、大雑把に言って、優しさだということになる。つまり、グリム童話では、外見の美しさに惚れ、『日本の昔ばなし』では、内面の美しさに惚れていると言える。「美しい」と形容された『日本の昔ばなし』の『手なし娘』でさえ、娘の美しさが若様の心を惹きつけたのではない。娘が「かわいそうな」身の上だったから、若様は娘に同情し、家に連れて帰ったのである。「しばらくたってから」結婚したところを見ると、一緒に暮らしてみても、娘の暮らしぶりが、母親の目になかった（「あの娘ならよい」と同様、若者に気に入ったのであろう。これらが、グリム童話と『日本の昔ばなし』の第4の特徴と相違である。

第5に、グリム童話も、『日本の昔ばなし』も、一方的恋愛結婚そのものがテーマとなったり、主なストーリーとなったりしていないということである。一方的恋愛結婚の話では、継母からいじめを受ける継子が辛い目に遭ったり、困窮したりするが、結局幸運をつかむというストーリーの話が多い。グリム童話では8話中4話、『日本の昔ばなし』では7話中5話もある。その場合、継母からいじめを受けるが、幸運をつかむ主人公が女性であるのは8話、男性であるのは『日本の昔ばなし』の1話だけである。ただし、こういう話では、結婚が即幸せとは限らない。つまり、結婚後も継母と実子に殺害されたり（『森の中の3人の小人』）、継母の陰謀で夫婦仲を裂かれたり（『日本の昔ばなし』の『手なし娘』）、子供を取り上げられた上に、火あぶりの刑に処せられそうになったり（『6羽の白鳥』）、お嫁に行く途中で殺されたり（『白い花嫁と黒い花嫁』、『白鳥の姉』）する。一方的恋愛結婚の他のストーリーとしては、誠実な者、親に従順な者が様々な試練をくぐり抜け、最後には幸運をつかむもの（『誠実フェレナントと不実フェレナント』、『かえるの報恩』、『鬼のむこ』の3話）、父親から求婚されて逃げ出し、『灰かぶり』のように、台所女になって、舞踏会で王様に見初められて結婚するもの（『千種皮』）、嘘をついてマリア様から罰を受けて辛酸を嘗め、結婚後も真実を告白するまで、苦難、試練が続くもの（『マリアの子』）、グリム童話の『白い花嫁と黒い花嫁』のように、結婚が決まりながら、継母に殺され、替え玉の実子に夫を奪われるが、蘇生して幸せをつかむもの（『白鳥の姉』）、敬虔な娘が悪魔の様々な悪事に打ち勝って幸せをつかむもの（グリム童話の『手なし娘』）がある。

では、一方的恋愛結婚はどのような役割を果たしているのでしょうか。次に具体的に見ていくことにする。

まずはグリム童話である。『6羽の白鳥』では、お姫様は、王様がやむを得ず迎えた新しいお后様の魔術により、6人の兄の王子と一緒に白鳥にされるどころであったが、運良くそれを免れ、森の奥深くに逃走し、そこで暮らしている時に、狩りをしていたある王様から見初められ、結婚することになった。それゆえ、この話の一方的恋愛結婚は、結果としては、継母の迫害からの救済の意味も持っている。『千種皮』では、実の父親から結婚を迫られるという身の毛もよだつ事件に遭遇したお姫様が夜逃げし、森の中に隠れている時に、ある王様に見つかり、お城へ連れて行かれて台所女になり、祝宴に出て王様と舞踏をし、見初められ結婚することになった。この話でも、王様の一方的恋愛結婚は、実の父親から求婚されて、夜逃げし、困窮しているお姫様を実質的に救う役割も果たしている。『誠実フェレナントと不実フェレナント』の鼻なし王様と王女の結婚は、王様が誠実フェレナントに命令して、愛する王女を無理に連れてこさせて強行した、いわば無理矢理結婚で、王女と誠実フェレナントの結婚を準備する意義以外には、何の意味もない。その王女の誠実フェレナントへの一方的恋愛結婚は、誠実な者は

結局は報われるということをも意味している。『聖母マリアの子』では、娘が育ての親の聖母マリア様に嘘をついて、罰を受け、荒野で塗炭の苦しみを味わっていた時、狩りをしていた王様にお城へ連れて行かれ、しばらくして見初められて結婚する。だから、王様の一方的恋愛結婚は、生死を彷徨うほど困窮していた娘の救済の意味が強い。しかし、それは仮の救済でしかない。つまり、グリム童話によく見られる結婚と違い、この場合は、結婚がそのまま幸福を意味しないのである。この段階では、マリア様は娘をまだお許しになっていないからである。結婚後も娘の不幸は依然として続いていく。娘が真の幸せを得るのは、真実を告白し、マリア様から許しを得た後のことである。メルヘンとはいえ、まるでキリスト教の説教話である。『森の中の3人の小人』では、王様の継子娘への一方的恋愛結婚は、「お母さんと妹（姉）の目から逃れられる」という継子娘の言葉にあるように、継母の酷くしつこいいじめからの救済でもある。『灰かぶり』では、継母とその実の娘二人から酷いいじめを受けていた灰かぶりが、王子との結婚で、幸福（Glück）をつかむ。まさにこのメルヘンにおいてこそ、結婚が継子いじめを受けた者の救済、幸せの象徴と言えよう。『手なし娘』では、悪魔に脅された父親によって、両手を切られた娘が家を出て彷徨っている途中に、同情した王様にお城へ連れて行かれ、見初められて結婚する。だから、王様の手なし娘への一方的恋愛結婚は、手を失って悲惨な目に遭っている者の救済の意味も持っている。ところが、この救済も『聖母マリアの子』と同じように、仮の救済でしかない。悪魔の攻撃が続くからである。しかし敬虔な手なし娘は、天使と神様のお恵みで、一生涯の幸せを得る。これまたキリスト教を讃える説教話である。『白い花嫁と黒い花嫁』でも、王様の継子娘に対する一方的恋愛結婚は、継母とその実の娘のいじめからの救済の意味もある。しかし、この話では、結婚そのものが継母（魔女）と実の娘によって妨害され、継子は殺されてしまう。死んで鴨になった継子娘が人間の姿に戻り、魔女とその娘が処刑されて初めて結婚ということになる。こういう意味では、王様の一方的恋愛結婚は、魔女たちの襲撃からの救済でもある。

次は『日本の昔ばなし』を見てみよう。『かえるの報恩』のあえな様の末の娘に対する一方的恋愛結婚は、父親に忠実な娘は結局は救われるという、親孝行者の幸福の象徴ともなっている。『白鳥の姉』のさしゅの殿さまの一方的恋愛結婚は、第三者的に見ると、落ちぶれて生活に困っているやまだむちの殿さまの妻の救済の意味合いが強い。『手なし娘』では、継子娘が継母にせつつかれた実の父親に両腕を切られ、山中に捨てられる。そこを馬で通りかかった若者が継子娘から訳を聞いて同情し、娘を家に連れて帰る。そしてしばらく一緒に生活をしてから、若者は娘を嫁にする。したがって、この結婚は、若者が娘に惚れた一方的結婚ではあるが、客観的に見れば、悲惨な目にあった娘の救済の意味もある。しかし、この救済も仮の救済である。継母の策略で、結婚生活が破壊され、娘は家から出て行かざるをいなくなったからである。しかしながら、夫の懸命な捜索により、二人は再会し、嬉しさの余り泣く。『灰坊』の長者の娘のみちがね（灰坊）に対する一方的恋愛結婚は、継母の陰湿な陰謀により、家を追い出された灰坊が長者に救われるという側面も持っている。灰坊は殿さまの息子とはいえ、ほぼ無一文（馬と着物のみ）で家を追い出されたのであるから、長者の娘との結婚は救いと言えよう。『べに皿かけ皿』のお殿さまのべに皿に対する一方的恋愛結婚は、継母からいじめを受けていたべに皿の救済の意味も持っている。『鬼のむこ』のお殿さま（あじがなし）の末の娘（おとまだるかな）に対する一方的恋愛結婚は、親（母親）に従順で、心根の優しい者は救われるという、いわば幸福の象徴ともなっている。しかし、この幸福は、嫉妬した長女によって破壊さ

れる。長女が新婦を殺し、自らがそれに成り代わるからである。こういう結末ではあるが、お殿さまとの結婚は、長女の激しい嫉妬が示しているとおおり、幸福を意味しているという事実に変わりはない。『米ぶき粟ぶき』の、ある男の米ぶきに対する一方的恋愛結婚は、粟ぶきと継母が羨ましきの余り貝になってしまったように、継母からいじめを受けていた米ぶきの救済の意味もかなり強い。

このように、一方的恋愛結婚は文字通り相手の意思、考え、感情などを無視し、一方的に結婚するものではあるが、実際には、それが、結果として、主人公を苦難、困窮、いじめ、迫害から救うものとなっている話が圧倒的に多い。15話、16組の結婚のうち、12話、12組の結婚がそうである。残りは、誠実な者、親に忠実で、従順な者が結婚によって報われる話（3話）である。だから、一方的恋愛結婚は、実際には、主人公を苦難から救ったり、主人公に報いたりする役割を果たしていると言えよう。これが第6の特徴である。唯一の例外は『誠実フェレナントと不実フェレナント』の王様が気に入った王女を一方的に連れてきて結婚する話だけである。しかし、この結婚は、誠実フェレナントと王女の結婚を準備する役割しか果たしておらず、結婚の分析の対象としては余りふさわしいものではない。

一方的恋愛結婚が主人公を救済する役割をも演じているため、一方的恋愛結婚の話はいわゆるハッピーエンドとなることが多い。15話中10話がそうである。しかし、結婚後も二人は幸せかというと、そうとも限らない。ハッピーエンドの話で、結婚後も明らかに幸せな話は、グリム童話と『日本の昔ばなし』2話ずつで、計4話しかない。これらが第7の特徴である。

第8に、継母やその実の娘によるいじめの話が多いこと（15話中9話）は指摘したが、いじめた者は、釘樽の中に入れて山頂から川の中に転がされたり（『森の中の3人の小人』）、目玉を鳩につつき抜かれたり（『灰かぶり』）、釘樽の中に素っ裸で入れられ、馬で引きずり回されたり（『白い花嫁と黒い花嫁』）、（継母と父が）地頭に罰せられたり（『手なし娘』）、（継母とかけ皿が）溝に落ちて死んだり（『べに皿かけ皿』）、（継母が）馬に喰い殺されたり（『灰坊』）、（継母と粟ぶきが）田の水の中に沈み、うらつぶ（宮入貝）になったり（『米ぶき粟ぶき』）、実子は斬り殺され、継母は実子の首を見て気絶死したり（『白鳥の姉』）と、ほとんどすべての話で、悪事の報いを受ける。迫害した継母が何の処罰も受けない例外は、継子6人を魔術で白鳥に変えた『6羽の白鳥』だけである。このメルヘンで処罰を受けるのは、結婚したお姫様を、赤ん坊を食ったと非難し、火あぶりの刑にして殺そうとした姑である。彼女は焼き殺される。

最後に、グリム童話と『日本の昔ばなし』にある同名の昔話、『手なし娘』の比較をしておく。この二つの話はストーリーも酷似している。

まず、手なし娘が手を切られるまでの話を見てみよう。グリム童話では、貧乏な粉屋が悪魔と約束する。悪魔が約束の娘を連れて行こうとするが、抵抗（清らかさ）にあって、娘を連れて行くことが出来ない。悪魔の脅しに屈した父親は、娘の同意を得て、娘の手を切る。『日本の昔ばなし』では、継子娘は、継子を心底憎んでいる継母の言いなりになった実の父親に、山奥に連れて行かれ、居眠りをしている間に、手を切られる。

グリム童話では、手を切られた娘は、旅に出る。天使にも助けられ、王様にも遭遇する。娘が「非常に美しく敬虔だった」ことに惚れた王様が一方的に娘をお后にする。『日本の昔ばなし』では、山中で手を切られ放置された娘は、偶然長者の若者に出会う。若者は娘に同情し、とりあえず、娘を家に連れて帰り、面倒を見る。そのうち若者は母親に結婚の許しを請い、手なし娘と結婚する。恐らく手なし娘の真面目な生活ぶりが気に入ったのであろう。すでに述べ

たことであるが、『日本の昔ばなし』の長者には手なし娘への恋愛感情があるのに、手なし娘にはその気持ちを打ち明けない。自分の母親に結婚の許可を願い出ている。まるで結婚相手が母親のようである。母親への従順さという以上のものである。長者の若者の目は、明らかに娘ではなく、家に向いている。家の支配の揺るぎなさを感じる。

グリム童話では、結婚後王様は戦争に行く。その間に、お后様は男の子を生むが、それを知らせる喜びの手紙を悪魔が「取り替え子を産んだ」と書き換える。王様の返事「后を大事に世話するように」との返事も悪魔が「后を子供と一緒に殺せ」と書き換える。悪魔が書き換えた最後の手紙には、后を殺し「舌と両方の目を証拠として取っておけ」と書いてあった。母君の心優しい配慮もあり、手なし娘は子供を背中に負い、旅に出る。敬虔な手なし娘を天使が無料の宿泊所に連れて行く。そこで7年暮らす。そしてまた神様のお恵みで、手も生える。戦争から帰った王様は、お后様を探しに出かける。無料の宿で妻に出くわした王様は、妻と子供をお城に連れて帰り、もう一度結婚式をあげ、楽しく暮らした。『日本の昔ばなし』では、江戸に上った夫に、男の子の誕生を知らせようと、早飛脚をたてた。途中、飛脚が手なし娘の生家に立ち寄ると、継母が「鬼とも蛇ともわけのわからない化け物が生まれた」と手紙を書き換える。手紙を受けとった夫は驚いたが、子供を「大切に育てて下され」と書いた。しかし、帰りに飛脚が生家に立ち寄ると、また継母が、そんな児の顔など見たくない、親子もろとも追い出せ、そうしなければ、江戸で暮らす、と書き換えた。事情を聞いた手なし娘は、子供を背負い泣く泣く家を出た。途中手なし娘がのどの渇きを癒そうと、流れて身をかがめて水を飲もうとすると、子供がずり落ちそうになった。無い手で押さえようとすると、不思議なことに両方に手が生えており、子供をしっかりと抱き止めていた。江戸から帰った夫が妻を捜しに出かけると、お社で、女乞食が「神さまに一心に祈って」いた。女乞食には手が生えていたものの、妻であった。三人はうれし泣きに泣き、一緒に帰って行った。

グリム童話では、『手なし娘』は、敬虔な手なし娘が神の力で悪魔に打ち勝つ話となっている。切り取られた手も神のお恵みで生える。夫との再会の場所も天使が世話をする。『日本の昔ばなし』では、継母から憎まれ、虐めを受け、父から手を切られた可哀そうな娘が、心優しい長者との結婚で救われる話となっている。子供の出来た幸せな家庭を崩壊させようとするのも、継母である。切り取られた手も偶然生える。しかし、その偶然は子供思いの母親の優しい気持ちの報いであろう。手なし娘はお社で神さまにお祈りをしているが、それはもう手の生えた後であり、手が生えたこととお祈りは何の関係もない。『日本の昔ばなし』の『手なし娘』には、全体として宗教的な雰囲気はほとんど感じられない。それに対し、グリム童話の『手なし娘』は、最初から最後まで、キリスト教の説話である。ストーリーの酷似した同名の話でも、グリム童話と『日本の昔ばなし』では、家の重みと自我の覚醒の度合いの違い以外にも、このような大きな違いがある。